

<論 説>

1840年代フランスにおけるドイツ人人口の動態(2)

特にパリのドイツ人に関して 下

的 場 昭 弘

目 次

(上)

はじめに

(1) パリのドイツ人

a) 外国人とパリ

b) 他の国のドイツ人コロニー

c) パリのドイツ人(以上前号)

(下)

(2) パリのドイツ人人口

a) ドイツ人人口に関する諸説の検討

b) ドイツ人人口の検討

(3) パリのドイツ人の職業, 居住分布

小 括

(2) パリのドイツ人人口

a) ドイツ人人口に関する諸説の検討

当時のパリのドイツ人人口についてはさまざまな説がある。100,000人以上から10,000人までそれぞれまちまちであるが、かといってそのどれかが間違いというわけでもない。統計データがたとえあったとしても、それはおそらく固定人口だけであり、短期滞在者やドイツ語を話すフランス人などは排除されるからである。一見しただけではそれが旅行者なのか長期滞在者なのかわからないというのも原因であろう。一口にドイツ人といっても、ドイツ語を話す民族であるとすれば、アルザスのフランス人まで含まれてしまう。町で聞くドイツ

語にはそうしたドイツ語も含まれるので、当然町中ドイツ人だらけということになる。特にアルザス地域からのパリへの移動は多く、パリの町にはアルザス人も大勢いた。⁽³¹⁾カナビッヒ (Canabich) はフランスでは約3,000,000のドイツ人がいると言っているが、これはアルザスやロレーヌの人口を入れた場合のことである [B, 13, S. 87]。当時のドイツ人からみて、彼らもドイツ人と考えたのは不思議ではない。しかし、本稿では当時の国境線にしたがって人口を分析しているのでそれらは除外される。当時の国境線に限定されるのは、当時のフランスの政治社会運動がドイツ圏と明確に異なっており、著者の問題意識はあくまでもたんなるドイツ人人口ではなく、政治社会運動との関係におけるドイツ人人口であるからである。

当時の文献からパリのドイツ人人口を見ると、いずれも100,000近い人口を示していることがわかる。たとえばルーゲは手紙の中で「パリには100,000以上のドイツ人がいて、その数はドレスデンの人口よりも多い」(Dresden, 18, Oct., 1843) [B, 76, S. 339] (別のところでは85,000人) [B, 76, S. 318]と述べている。ルーゲがパリに居を構え、そこで出版活動を始めたのは、この100,000人の魅力であった。『フォアヴェルツ』も、こうしたドイツ人を販売の対象としたが、その『フォアヴェルツ』もその1号でドイツ人の数を80,000人と評価している (Die Deutschen in Paris, *Vorwärts*. Nr. 1, 1844.)。『フォアヴェルツ』のライヴェル新聞である『ドイツ人の水先案内人』は1844年の創刊号で70,000人以上 (21, Juli, 1844), 1845年に「パリのドイツ人」という記事の中で87,000人 (6, April, 1845 No. 11) [B, 23]と評価しており、ほとんど両新聞の評価は同じであった。80,000人前後の評価と言うのは、当時の評価としては多数派である。たとえば、グロッシー (Glossy) の報告書 (Glossy, *Literalische Geheimberichte des Vormärz, Jahrbuch der Grillparzer Gesellschaft*, No. 21-23, Wien, 1912, S. 90), ブリュンチュリの報告書 (Blüntschli, J. C., *Die Kommunisten in der Schweiz, nach den bei Weitling vorgefundenen Papieren*, Zürich, 1843, S. 49), クンツェ [B, 51, S. 259], クランダ (Kuranda, *Grenzboten*, 2Jg. 1843) などがそれである。おそらく当時の多くのドイツ人にとってパリのドイツ人人口のイメージは、80,000人ぐらいということ

あったと思われる。しかしクンツェは、ドイツ人の地域別の状態にまで触れて、「パリに多くのドイツ人を供給しているのはバーデン、ヘッセン、バイエルンのような国境の地域であり、ザクセンの国民も多く、スイス人も少なくはない、プロイセンはライン地域のものを除いてオーストリア人以上に少ない」[B, 51, S. 259]と言っているが、これを見るとわかるようにこのドイツ人の数はスイスやオーストリアまで含めてのことである。もちろんクンツェも実際のことは知らないと言っており、あくまでもこれはドイツ人が多いことから作られたパリでの噂の可能性がある。ドイツ人が多いというのも、これまた不確かで「多くの民衆そして教養あるパリの人々にとってさえ、ザクセン、プロイセン人そしてスイス人、アルザス人もみんなドイツ人である」[B, 51, S. 259]といった具合であった。

さて80,000人という数字はざっと当時のパリ市の人口を1,000,000としても、その1割近くであるから、少し多すぎる数とも思える。いくらドイツ人が多いといっても10人に1人は多すぎるだろう。もっと低めに人数を見積った者は当時いなかったのであろうか。低い見積としては、ベルンシュタインの70,000人から80,000人[B, 12, S. 341]、ヴァイル(Weill, A)の50,000人(Eine Szene aus der deutschen Arbeiter in Paris, *Telegraph für Deutschland*, Nr. 60, 1842.), シュトリカー(Stricker, W., *Die Verbreitung des deutschen Volkes über die Erde*, Leipzig, 1845, S. 149)の40,000-60,000人、ゲルマニア(*Germania*, Bd. 2, 1848, S. 200)の30,000人、シュパチヤー(1803-54)(Spazier, *Ost und West, Reisen in Polen und Frankreich*, Stuttgart, 1835, S. 311)の20,000人などがある[B, 81, S. (32) 98]。もちろん彼らも根拠に明確なものがあるわけではない。1851年の統計ではドイツ人の人口はセーヌ県で13,000人であり、いくらドイツ人が革命のため故郷に大量に帰ったとしても100,000から10,000になるというのは変である。革命期の変動を最小限に考えると少ない見積は信用できる。しかも、再びドイツ人が増え始めた1860年代の人口が34,237人[B, 69, p. 1027]であり、100,000人にまで回復していないという事実からしても、もっともな数字と思える。しかし、彼らの数字は少数派であった。

こうした数字に対してその後の人々はどのように捉え直しているであろうか。マルクス研究の方から接近したコルニュ (Cornu, A.) は、当時の人々の見解をそのまま入れて、100,000 人であるとやや大目に見積っている [B, 18, p. 6]。バレンティン (Valentin) は、1847 年の「ドイツ中央ビューロー」(Bureau central germanique) が「17,000 人のドイツ人と 200,000 人のフランス人の住所をもっている」という報告から (1844 年 7 月 21 日) [B, 23] パリの人口を 1,000,000 として 17,000 人×5 すなわち 80,000 人以上のドイツ人の人口が存在することを指摘している [B, 90, S. 608]。またブレーシュも、従来の説を崩すことなく、それまでの意見を踏襲して 80,000 人としている [B, 11]。大体 1960 年代までは、当時のドイツ人の評価した数字に影響されるのが普通であった。わが国では、ここまで気にする研究者は少なかったということもあって、これをたんに踏襲するだけであった。しかし、1963 年にシーダーがフランスの史料を駆使して、この分野へ分け入ることによって、状況は一変する。

まずシーダーは 80,000 人という数字がパリ人口の 10 分の 1 に近いことに疑問をもった。彼はパリの人口史に関する重要な著作であるシュヴァリエを使い、その真実に迫ろうとした。彼が利用したのは 1833 年の外国人の死亡者に占める割合で、4% しか外国人がいないことであった。すなわち、外国人とフランス人が同じ死亡率ならば、外国人は全体で 24,000 人しかいないことになる。とすれば、その後ドイツ人だけ急激に増大することはおかしいことになろう。そして、結論としてもっとも少ない見積である 20,000 人から 40,000 人ではなかろうかと主張した [B, 81, S. 98]。もちろん、外国人の年齢が低く死亡率が低いということからいけばほとんど意味のない議論かもしれないが、少なくともこの問題がはじめて当時の統計史料を使って議論されはじめたことになる。

シーダーを受けて、パリのドイツ人人口を本格的に研究したのがグランジョンである。グランジョンは、残された史料をかなり精密に検証した上で、いくつかの方法からパリの人口を導き出す方法を考えだした。その方法とはまず第一に産業統計からドイツ人の各分野での割合を出し、それを各分野総数にかけする方法、第二にオテル・ガルニの宿泊者数から導き出す方法、第三に過去の一

定の時期の外国人の比率を出し、それを単純に外国人の総数にかける方法である。

第一の方法の場合は、パリのドイツ人一般だけでなくドイツ人労働者の人数が出てくるという利点がある。しかしこの方法には次の欠点がある。すなわちパリの産業統計 [B, 87, a] を利用している点でフランス人の職種別人口はかなり正確に出せるものの、外国人労働者の人数については、この統計が明確に数字をあげていないため、当時一般的に言われていたドイツ人の割合をそれに当てはめるしかないということである。これにしたがって、人数を割り出すと、靴職人 53,111 人のうちドイツ人が $1/3$ を占めるとすると、約 16,000 人、仕立屋 22,828 人のうちドイツ人が $2/5$ を占めるとすると約 8,000 人、家具職人 38,092 人のうちドイツ人が $1/5$ を占めるとすると約 7,000 人、全体で 34,419 人のドイツ人労働者がいたことになる [B, 31, p. 233]。もちろん、このドイツ人の比率に客観的な正当性はない。先のシーダーは 15,000 人から 20,000 人のドイツ人労働者がパリにいたであろうと言っているが [B, 81, S. 99]、彼も同じ統計を使い、その半分の数値を得ている。二つの数値の差はもっぱらドイツ人の割合をどう見るかにかかっている。また当時の文献でも「ドイツ人労働者は 6,000 から 7,000 人の集団をなしている」 [B, 5, p. 722] と言っているので、さらにその半分という可能性もある。もっともそこで使われている資料では靴職人が 24,000 人、仕立屋 20,000 人、家具職人 14,000 人 [B, 5, p. 729] であり、やや少ない。しかも、そこでは靴職人のうちロレーヌ人 5,000 人という数字があげられ [B, 5, p. 722]、ドイツ人と思われる人々にはロレーヌ人がいるという留保をつけている。労働者のコロニーの人口から、シーダーは労働者の結社の構成メンバーまでさかのぼって、1832-34 年のドイツ民族協会 90 人、1836 年の追放者同盟 100 人、1840-42 年の義人同盟 50 人という数字を出している。この人数からすると、彼らは大勢のパリのドイツ人労働者のうちのほんの一部にすぎないことがわかる。

さて、この方法は当時のドイツ人の全体像を知るためにいまひとつクリアしなければならない問題を抱えている。つまりこの労働者のコロニーに労働者で

はないドイツ人をどれくらい付加できるかということである。他の職種の職人、学生、外交官、ジャーナリストなどの人口を調べることは至難のわざである。せいぜいわかるのは援助金を受けていた政治亡命者の数であるが、しかしこれはドイツ人に関しては非常に少なかった⁽³³⁾。たとえば1834年3人、1837年2人ときわめてすくないことがわかる(シュースターとアーレンス(Ahrens))。したがって、こうした人々をかりに10,000人弱とみると45,000人ぐらいのドイツ人ということになり、これでも80,000人にはほど遠いことがわかる。

第二の方法の場合は、比較的移動性のある人口がわかるという利点がある。グランジョンは、オテル・ガルニに滞在するものの数を全体の固定人口のうち10%と仮定し、オテル・ガルニの外国人の数を割りだしている[B, 31, p. 225]。これによると、1831年の人口が3423人であるので、その10倍の固定人口があったということになる。このような手続きによって、1833年46,660人、1834年66,270人、1835年75,350人、1836年81,750人、1837年90,520人、1838年91,900人、39年95,530人、1840年92,290人、1841年83,880人という数字がでてくる[B, 31, p. 227]。ただし、1842年以降には外国人の数が不明であるため、増加、減少の数を1830年の外国人の数49,450人に加えていって、その数をはじき出している。すなわち1842年118,302人、1843年126,796人、1844年135,826人、1845年146,620人、1846年159,336人、1847年173,711人、1848年183,914人となる。この外国人の数からドイツ人を割り出すのであるが、その際1839年のドイツ人の割合25%から、92,290人に25%をかけて、ドイツ人の数を23,200人と出している。その後にはこうした百分率の資料はなく、1851年出版の『パリ産業統計』から1847-48年の34.1%を出し、それを159,336人にかけて約54,000人となる[B, 31, p. 234]。こうした方法の難点は、まず第一にオテル・ガルニの固定人口がなぜ10倍であるのかという仮定にある。こうした前提はあくまでも仮定にすぎない。またそのうちのドイツ人の数も、1851年の統計21.8%は別として、必ずしも信頼できる数字ではない。この方法で計算すると、ドイツ人の数の最小値は1831年20%で6,000人、最大値1848年で約60,000人ということになる。

オテル・ガルニの資料を使う場合にはいくつかの問題を検討しなければならない。オテル・ガルニの多くは確かに労働者が泊まるホテルであった。⁽³⁴⁾ フレジェは、ベットからこっそりと盗みを働く泥棒について書いているが [B, 27, p. 222], 寝るとき財布を肌身離さずにもっていなければならない木賃宿でもあった。⁽³⁵⁾ しかし、すべての労働者がそこに泊まっているわけではなく、当然多くの労働者は住み込みで働いたり、同郷のものところに転がり込んでいる場合が多い。そのため、その数値が全体のどれくらいを示しているかきわめて推測しにくい。しかも、長期滞在者もいれば、短期滞在者もあり、その回転において旅行者との区別がつきにくい側面がある。たとえば、建築労働者の場合、11月にパリを去り、3月に戻るというパターンをとり、仕立屋、靴屋、家具職人といったドイツ人がもっとも多い職種もパリでの仕事はもっぱら秋から冬であり、統計のデーターは毎日とっていかないと十分なデーターにはならない。

一方旅行者のほうであるが、1800年から1850年までに約550,000人から600,000人の旅行者がパリを訪れたと言われている [B, 28, p. 241]。年あたり10,000人ということになるが、ドイツ人旅行者はゲルボによると10%前後であったということなので、だいたい1,000人ぐらいということになる [B, 28, S. 244]。しかし、グランジョンは、もっと多いとみている。すなわちオテル・ガルニの宿泊者のうち、40%が労働者以外ということになっているので、それがすべて旅行者だとして、固定人口のうち旅行者の占める割合について1831年15,600人、1836年30,000人、1841年44,000人、1846年63,000人という数字を出している [B, 31, p. 230]。さらに、移動人口を出入の平均から割り出し、その割合も同じとして、1830年8,000人、1836年21,800人、1846年24,400人という数字を出している。単純にそのなかでドイツ人がしめる割合を10%としてもドイツ人の数はゲルボの計算より2倍多いことになる。この数字についても、もちろん旅行者をアメリカへいく途中のものまで含めるのか、単純に遊興のもののみを含めるのかで、違いがでてくる。

実際オテル・ガルニといってもすべてが労働者や貧しい人々の宿というのではない。むしろ一般的にオテル、さらには高級なオテルも含まれている。警察

の統計 [A, 1, h] でも、有名人の宿泊先の中にもオテル・ガルニがあげられているし、ドイツ人旅行者のための案内書にも推薦できるオテル・ガルニがあげられており、そこではルイ・ルグラン通りの外国人専用オテルが一般的に推薦され、商人のためにはショセ・ダンタン、ベルジェール (Bergère) 通り、リシュリュール通り、遊興旅行のものには、パレ・ロワイヤル、大通りのホテル、チュイルリー (Tuileries) やサン・トマ・ダカン (Saint Thomas d'Aquin) (マルクスの住んだ地域) の近くなどが推薦されている。リシュリュール通り 109 番 (現在の 97 番) のオテル・ガルニには、プロイセン公使ツヴィルナー (Zwirner), スタボルスキー (Satborski), ロシアの書記官コヴァレフスキー (Kovalevsky) など多くの著名な人物が宿泊している。ここは有名なオテル・ヨーロッパ (Europe) で、⁽³⁶⁾ 当時豪華さでは定評があったオテルである。40 の部屋があり、二階の部屋は一日 15 フランもしていた。有名なドイツ人の音楽家マイヤビーアは 1830 年代からここに住んでおり毎年冬にコンサートを開いていた [B, 45, 94f]。

さて第三の方法であるが、この方法は、もっとも演繹的である。外国人の数がわずかでもわかっていれば、それにドイツ人のパーセンテージをかけてやれば数字がでてくることになる。たとえば、1844年の警察の数字で外国人が34,000人いるとされているが、それにドイツ人の比率20-35%をかけると約7,000人から10,000人という数字がでてくる。もちろん、この数字自体に疑問を出せば、無意味になるが、大体のところは出ることになる。こうした方法でいくとたいていの場合外国人、ドイツ人の数はかなり少なくなってしまう。当時の公式統計では、外国人の数はドイツ人の噂と違いかなり低く見積られているからである。

以上の結果からグランジョンのドイツ人人口の推定がでてくる。その推定によると最大限40,000人から50,000人ということになる [B, 33, p. 491]。もっとも彼は1847年最大値60,000人も示しているので、40,000から60,000といったところが彼の推測値ということになろう。シーダーの推測値は20,000-40,000、当時の警察報告ではさらに10,000弱であり、かなりばらつきがある。そこで、次に具体的に推測値の謎に迫ってみることにする。

b) ドイツ人人口の検討

パリのドイツ人人口について現在までのところ確実な数字は与えられていない。しかし、諸説の検討からもわかるように、当時の噂による評価 80,000-100,000 には別として、10,000 弱から 60,000 までの数値が信頼できるものである。そこで、この数値をもっと絞り込むことができないかを試してみることにする。

まず外国人人口を考える場合に問題になっていたパリの人口に占める割合である。要するにパリの人口が当時どれくらいであり、10,000 から 60,000 までのドイツ人人口は、当時のパリの人口からみて、さして目だったことでもなかったのか、あるいは異常なことであったのか。このあたりをまず見ておこう。シュヴァリエは、その著作の中で、パリの郊外を合わせた人口 1836 年 1,002,633 人、1841 年 1,059,825 人、1851 年 1,277,064 人 [B, 14, p. 40] と書いている。これにしたがうとドイツ人の人口は、1%弱から 6%までの間ということになる。しかし、これには郊外の人口も入っている。郊外の人口は、1830 年から 1851 年までの時期に 3 倍、223,802 人に増えており、パリ自体の人口増加より多かった。しかし、ドイツ人の多くはこの時期バティニョル、モンマルトル (Montmartre)、シャペル (Chapelle)、ヴィレット、ベルヴィル、ベルシー (Bercy)、ヴォージラール (Vaugirard)、グルネル (Grenelles) [B, 31, p. 224] へと広がっており、郊外の人口を含めることは意義がある。ただし、郊外の外国人人口は、パリ市の記録にはないという難点がある。あくまでもグランジョンの評価も、パリ市の内部での数であり、郊外を含めた人口となると不明である。⁽³⁷⁾しかし、1851 年のセーヌ県全体での統計で見ると、郊外で何万というドイツ人がいたとも思えない。

さて約 1,000,000 の人口のうち 10,000 から 60,000 という数字は多いのであろうか、少ないのであろうか。1833 年のパリ市民の出身地に関する調査によると、50 人がパリ生まれ、41 人がフランスの他県生まれ、パリのあるセーヌ県生まれが 2 人、外国人は 4 人という結果になっている (不明 3) [B, 72, p. 164] つまり、4%が外国人である。そのうち、ドイツ人がその 20%だとすると、0.8%と

なり、先の最低限の推測値とだいたい一致し、8,000人強ということになる。これからすると1%弱がもっともであるということになる。しかし、1851年、1861年、1872年（この年の統計ではアルザス、ロレーヌが含まれているので、ドイツ人の割合だけは高い）の場合外国人の率は増え、約5-6%になっている。そのうちドイツ人は1%強で10,000から20,000に増えている。1840年代の人口増加を考えて見ても、おおくて2%であったであろう。とすると、ドイツ人のパリの人口に占める割合は100人中、0.8人から2人が妥当であるということになる。すなわち6,000人から20,000人という数字である。

次に、グランジョンが推測値の典拠としたオテル・ガルニの資料を使って、検討してみることにする。オテル・ガルニの人口についてシュヴァリエが「オテル・ガルニの人口は必ずしも都市の成長のすべてについて答えてくれるわけではないが、一般的にはそうであると信じられていた」[B, 15, p. 227]と述べているように、当時の人口を知る上で大変重要な史料である。警視庁がとったオテル・ガルニの記録（Bulletin de Paris）は、次の細目にわたって採られている[A, 1, h]。1) 労働者、2) メゾン・ガルニ（オテル・ガルニ）、3) 質屋、4) 逮捕、5) 食料事情、6) 株式市場、7) パリに到着した主要人物。ここで重要なものは特に2) 番目のメゾン・ガルニである。毎日のチェック・イン、チェックアウトの状況がきめ細かく記録されていて（表(2)）、さらに一月に数回労働者の数と、就業数、失業数、数カ月おきにオテル・ガルニの数と総宿泊者数が記載されている（表(3)）。グランジョンは、おおざっぱに年を中心に取り上げているが、ここでは毎日の記録を基準にして、チェック・イン、チェックアウトの月別の総和、月別の平均値を出し、そこから年の総和、年の平均値を出し、その値を基準にして外国人、ドイツ人の数を出していくことにする。

まず表(2)を見ると、フランス人と外国人のおおよその比率が判明する。1841年から1844年までのフランス人と外国人のチェックイン、チェックアウトの比率は、おおよそ8対1である。すなわち、8人に1人の割合で外国人がオテル・ガルニに宿泊しているということになる。この比率を単純に全宿泊者数に占める外国人の割合と考えてみよう。こうした前提の上に立って表(4)のような

形で人口を割り出すことにする。まず宿泊者数の $1/8$ が外国人宿泊者であるとする。そうするとCの外国人宿泊者の数が出てくる。つぎにパリ在住の全外国人の数が外国人宿泊者の何倍に当たるかを考えてみる。それはパリ全体の人口と全宿泊者の数の比率がひとつのヒントになる。すなわち外国人宿泊者と全外国人との比率もこれと同じだとするわけである。これによって、 B/A が得られる。この倍率を適用して得られたパリの全外国人の数がDである。さらに、この全外国人から全ドイツ人を導き出す作業を行う。これにはすでに問題にしたドイツ人の比率から最大限で25%、中間で20%という値を応用する。こうして求めた値がEとFである。これを見るとドイツ人の人口が最大値で33,000人から36,000人、中間の値で26,000人から29,000人ということになる。しかし、この数も多すぎるように思える。その理由は、外国人の宿泊者と全外国人の割合がパリのホテルの宿泊者とパリの人口の割合と等しいとは思えないからである。外国人の場合、ホテルに宿を求める率はフランス人の場合よりもおそらく多いであろう。とすると、外国人の場合ホテルの宿泊者の率を高く設定しなければならないことになる。

シュヴァリエは、もっとも宿泊率の高い例として皮革工をあげ、その割合を $1/3$ としている [B, 14, p. 182]。そこで $1/3$ という割合で考えてみた数値をドイツ人人口の最小値としてE', F'に出すことにした。これによると外国人の全人口も25,000人前後で、ドイツ人人口は5,000人前後ということになる。もちろんこれは最小値である。その他の職種ではホテルにいる確率が低いであろうから、ドイツ人の数もおのずと増えることになろう。しかし、テュラル (Tulard) はこのホテル・ガルニの史料から次の文章を引用している。「1844年6月3日：この頃パリには34,000人の外国人がいる」 [B, 89, p. 160]。この情報は、ホテル・ガルニにいる外国人と全外国人人口との比率が $1/4$ ということの意味しているわけであり、おのずとドイツ人人口も8,000人前後ということになる。しかし、もちろんこれも厳密であるわけではない。グランジョンはこの数字をとりあげて、史料自体根拠のないものであると批判している [B, 31, p. 221]。これらの結果を総合すると、最小値と最大値のあいだの数字がドイツ人

表(2) オテル・ガルニの毎日のチェックイン、チェックアウトの月別、総人数及び平均人数

	総人数				日平均人数			
	フランス人		外国人		フランス人		外国人	
	チェックイン	チェックアウト	チェックイン	チェックアウト	チェックイン	チェックアウト	チェックイン	チェックアウト
1841年								
1月	26,570	26,847	3,355	3,001	857	866	108	97
2月	23,869	25,410	2,989	2,483	852	908	107	89
3月	33,186	29,758	4,269	3,293	1,071	960	138	106
4月	35,217	31,470	4,759	4,199	1,174	1,049	159	140
5月	32,642	32,386	4,859	4,366	1,053	1,045	157	141
6月	27,180	28,758	4,474	4,113	906	959	149	139
7月	30,155	32,154	5,163	4,491	973	1,037	167	145
8月	26,055	31,085	5,604	4,768	869	1,036	187	159
9月	28,009	28,111	5,668	4,721	966	969	195	163
10月	30,891	31,246	6,020	4,972	996	1,008	194	160
11月	28,185	27,525	4,681	3,754	940	918	256	125
12月	25,885	29,061	3,772	3,167	835	957	122	102
総和	347,844	353,811	55,613	47,328	11,492	11,712	1,939	1,566
月平均	28,987	29,484	4,634	3,944	958	976	162	131
1842年								
1月	25,141	27,677	3,328	2,848	811	873	107	92
2月	23,859	23,260	3,347	2,688	852	831	120	96
3月	33,190	28,016	4,576	3,308	1,070	904	148	107
4月	32,281	29,235	4,796	4,106	1,041	975	160	137
5月	31,047	31,740	4,959	4,629	1,002	1,024	160	150
6月	27,921	29,736	4,578	4,305	931	991	153	144
7月	27,071	28,303	4,947	4,442	873	913	160	143
8月	29,045	30,826	5,784	5,080	937	994	187	164
9月	29,353	28,639	5,909	5,009	978	955	197	167
10月	30,763	30,998	6,346	5,336	992	1,000	205	177
11月	28,563	28,830	4,657	4,159	952	961	155	139
12月	23,840	28,493	3,675	3,451	795	950	123	115
総和	342,074	345,753	56,902	49,361	11,234	11,371	1,875	1,631
月平均	28,506	28,813	4,742	4,113	936	948	156	136
1843年								
1月	26,753	28,654	3,873	3,371	863	924	125	109
2月	24,179	23,676	3,638	3,013	864	848	130	108
3月	30,489	27,508	4,420	3,585	984	887	143	116
4月	34,299	31,733	4,816	4,614	1,143	1,058	161	154
5月	33,062	32,111	5,507	4,717	1,067	1,036	178	152
6月	28,349	30,517	5,231	5,019	945	1,017	174	167
7月	31,892	33,115	5,830	5,572	1,029	1,068	188	180
8月	29,426	30,572	5,930	4,979	949	986	191	161
9月	29,342	29,356	6,199	5,215	978	979	207	174
10月	32,025	31,952	6,469	5,404	1,033	1,031	209	174
11月	29,790	28,451	4,401	4,420	993	948	147	147
12月	23,336	26,013	3,699	3,185	753	839	119	103
総和	352,942	353,658	60,013	53,094	11,601	11,621	1,972	1,745
月平均	29,412	29,472	5,001	4,425	967	968	164	145
1844年								
1月	26,902	28,521	3,697	3,078	868	920	119	99
2月	26,793	25,588	3,853	3,081	924	882	133	106
3月	32,049	28,641	4,245	3,344	1,045	924	137	108
4月	35,851	32,633	5,201	4,143	1,195	1,084	173	138
5月	38,293	36,491	5,887	4,955	1,235	1,177	190	160
6月	31,892	32,863	5,947	5,300	1,053	1,060	198	177
7月	30,188	32,521	6,098	5,332	972	1,049	197	172
8月	26,482	28,303	4,670	4,893	859	913	151	158
9月	28,252	27,927	6,039	5,194	974	963	208	179
10月	34,683	35,304	6,835	5,442	1,119	1,139	220	176
11月	31,490	29,635	5,081	4,069	1,050	988	169	136
12月	25,008	30,736	4,226	4,030	807	991	136	130
総和	367,883	369,163	61,779	52,861	12,111	12,090	2,031	1,739
月平均	30,657	30,764	5,148	4,405	1,009	1,008	169	145

表(3) オテル・ガルニの数、宿泊者総数、労働者の数、失業者数、オテル・ガルニの平均宿泊者数、失業率

	ホテルガルニ の数(戸) A	宿泊者総数 (人) B	労働者数 (人) C	就業者数 (人)	失業者数 (人) D	ホテルガルニの 平均宿泊者(人) B/A	失業率 (%) D/C
1841年							
3月1日	5,160	59,824				11.59	
3月14日			39,940	33,198	2,342		5.86
3月20日			35,611	33,301	2,310		6.49
4月4日			37,922	35,594	2,328		6.13
4月10日			39,048	36,891	2,157		5.52
5月9日			34,450	32,393	2,057		5.97
5月17日			39,982	37,847	2,135		5.34
6月27日			38,902	36,512	2,390		6.14
7月5日			39,606	37,494	2,112		5.33
7月11日			39,734	37,524	2,210		5.54
7月18日			38,375	36,175	2,199		5.78
9月1日	5,262	65,536				12.45	
10月1日	5,232	65,411				12.50	
11月7日			38,901	36,110	2,790		7.17
12月3日	5,222	65,643				12.57	
12月5日			37,839	35,229	2,609		6.89
12月8日			36,202	32,590	3,612		9.97
1842年							
2月13日			34,173	31,893	2,575		7.53
2月20日			34,651	30,230	4,421		12.75
3月5日			35,941	32,318	3,623		10.45
3月20日			35,568	32,197	3,371		10.46
4月24日			40,416	37,877	2,539		6.28
5月1日	5,174	69,259				13.39	
6月1日	5,168	69,017				13.35	
6月5日			40,536	38,653	1,883		4.64
6月20日			39,122	37,139	2,093		5.34
6月26日			44,375	42,335	2,038		4.59
7月31日			38,175	36,209	1,966		5.15
8月14日			40,997	39,123	1,874		4.57
8月28日			41,238	39,115	2,123		5.15
9月11日			40,437	38,616	1,821		4.50
9月18日			41,059	39,122	1,937		4.71
9月25日			41,218	38,775	2,443		5.92
10月1日	5,187	66,783				12.87	
10月10日			41,501	39,165	2,336		5.62
10月30日			40,380	38,473	1,907		4.72
11月10日			39,448	37,738	2,710		6.86
12月4日			39,131	36,159	2,972		7.59
12月18日			38,126	34,809	3,317		8.70
1843年							
1月8日			36,938	33,991	2,947		7.97
1月22日			36,477	33,099	3,378		9.26
1月29日			36,694	33,408	3,286		8.95
2月6日			36,699	33,959	2,740		7.46
2月12日			36,946	33,435	3,475		9.41
2月19日			35,219	32,006	3,213		9.12
3月1日	5,234	63,082				12.05	
3月12日			36,779	33,845	2,934		7.97
3月19日			36,783	34,136	2,647		7.19
4月23日			39,273	37,231	2,042		5.19
5月14日			41,361	38,940	2,421		5.85
5月21日			41,127	38,764	2,363		5.74
6月1日	5,194	70,483				13.57	
7月3日			41,810	39,419	2,391		5.71
7月24日			41,267	38,320	2,947		7.14
8月13日			40,805	38,475	2,336		5.72
8月20日			40,506	38,334	2,172		5.36
9月10日			40,224	37,516	2,708		6.73
9月17日			39,321	37,089	2,232		5.67
10月28日			38,655	36,240	2,415		6.24
11月1日	5,228	68,204				13.05	

11月12日			39,708	36,663	2,445		6.15
11月19日			40,622	38,099	2,523		6.21
12月1日	5,229	67,441				12.89	
12月17日			37,883	35,360	2,523		6.65
1844年							
1月8日			36,484	31,160	3,890		10.66
2月11日			35,372	31,627	3,745		10.59
2月25日			31,350	31,350	3,770		12.03
3月10日			35,339	21,711	3,628		10.27
3月24日			36,631	32,725	3,906		11.94
4月7日			38,338	34,778	3,560		9.29
4月15日			39,354	35,403	3,950		10.04
4月21日			38,874	5,786	3,088		7.94
4月28日			38,770	35,682	3,088		7.96
5月1日	5,324	71,761				13.48	
5月5日			40,135	37,033	3,102		7.73
5月12日			40,636	37,715	2,921		7.19
5月18日			41,029	38,020	3,009		7.33
5月27日			41,693	39,063	2,630		6.31
6月1日	5,276	73,399				13.91	
6月9日			41,253	38,918	2,335		5.66
6月16日			42,666	40,142	2,524		5.91
6月30日			41,204	39,250	1,954		4.58
7月7日			42,309	39,868	2,441		5.77
7月14日			42,006	35,501	2,506		5.97
7月21日			41,585	39,237	2,348		5.65
7月28日			42,781	40,492	2,289		5.35
8月11日			42,079	39,584	2,495		5.92
8月18日			41,908	39,391	2,557		5.10
8月25日			41,984	39,462	2,522		6.01
9月9日			41,682	39,254	2,422		5.81
9月15日			42,325	39,939	2,386		5.64
9月22日			42,455	40,060	2,395		5.64
9月26日			41,602	39,390	2,212		5.32
9月29日			42,365	40,201	2,164		5.11
10月1日	5,391	68,412				12.69	
10月14日			42,751	40,468	2,283		5.34
10月20日			42,280	40,553	2,337		5.53
11月1日	5,409	69,064				12.76	
11月10日			41,728	39,346	2,382		5.71
11月18日			43,164	41,012	2,152		4.99
11月24日			41,918	39,605	2,313		5.52
12月1日			41,029	39,564	2,365		5.76
12月3日	5,450	70,352				12.90	
12月8日			40,499	36,400	4,029		9.95
12月15日			39,243	35,008	4,235		10.79
12月30日			38,156	33,362	4,794		12.56

の人口であろうということが結論づけられる。すなわちパリのドイツ人人口は5,000人から36,000人の間であったということである。しかし、この数字からは年度毎の変化は十分つかめない。

次に年度毎の変化をつかむことにしよう。表(2)からフランス人のチェックイン、アウトの年間人数はともに300,000から400,000人、外国人のチェック・イン、アウトの年間人数は40,000から60,000人であることもわかる。ドイツ人をそのうちの1/4から1/5とするとドイツ人の流入、流出の数は8,000から15,000人となる。一方流入、流出数に関してフランス人の場合、毎年流出者

表(4) オテル・ガルニの宿泊者総数とドイツ人の数

	宿泊者総数(人) A	パリの総人口(人) B	総人口と宿泊者との比率(B/A)	外国人宿泊者数 $A \times 1/8$ C	全外国人(人) $C \times B/A$ D ※	ド イ ツ 人			
						E $D \times 1/4$	F $D \times 1/5$	外国人総数と外国人宿泊者数との比率 3:1の場合	
								E'	F'
1841									
3月1日	59,824	1,059,825	17.72	7,478	132,510	33,128	26,502	5,609	4,487
9月1日	65,536	1,059,825	16.17	8,192	132,465	33,116	26,493	6,144	4,915
10月1日	65,411	1,059,825	16.20	8,176	132,451	33,113	26,490	6,132	4,906
12月3日	65,643	1,059,825	16.15	8,205	132,511	33,128	26,502	6,154	4,923
1842									
5月1日	69,259	1,093,256	15.79	8,657	136,694	34,174	27,339	6,493	5,194
6月1日	69,017	1,093,256	15.84	8,657	137,127	34,282	27,425	6,493	5,194
10月1日	66,783	1,093,256	16.37	8,348	136,657	34,164	27,331	6,261	5,009
1843									
3月1日	63,082	1,126,687	17.86	7,885	140,826	35,207	28,165	5,914	4,731
6月1日	70,483	1,126,687	15.99	8,810	140,872	35,218	28,174	6,608	5,286
11月1日	68,204	1,126,687	16.70	8,526	142,384	35,596	28,477	6,395	5,116
12月1日	67,441	1,126,687	16.70	8,430	140,781	35,195	28,156	6,323	5,058
1844									
5月1日	71,761	1,160,118	16.17	8,970	145,045	36,261	29,009	6,728	5,382
6月1日	73,399	1,160,118	15.81	9,175	145,057	36,264	29,011	6,881	5,505
10月1日	68,412	1,160,118	16.96	8,552	145,042	36,261	29,008	6,414	5,131
11月1日	69,064	1,160,118	16.80	8,633	145,034	36,259	29,007	6,475	5,180
12月1日	70,352	1,160,118	16.50	8,794	145,101	36,275	29,020	6,596	5,276

※1848年になると史料に外国人の内訳が出ている。それによるとドイツ人の割合は10-20%でこの値より少ない[A, I, i]。

の方が多いが、外国人に関しては、毎年流入者の方が多い。どの程度毎年増大しているかということ計算していくと、毎年約7,000人から8,000人(ドイツ人1,400-2,000人)ずつ増加していったことがわかる。この増加数を先ほどと同様に計算すると最低3倍で4,200人から6,000人ずつの増加,最大で17倍34,000人となる。もちろん、ドイツ人のみが増加したわけではないのでこの数字も問題が多い。しかし、単純に増加数にしめる割合としてオテル・ガルニの割合が高いとすれば、4,200人くらいドイツ人が毎年増加していった可能性はある。そうすると1840年のドイツ人人口をグランジョンの言うように約20,000人とすれば、1845年のドイツ人人口は $20,000 + 4,200 \times 5 = 41,000$ 人ということになる。1848年2月革命以前のドイツ人人口はこれによると $20,000 + 4,200 \times 8 = 53,600$ 人ということになる。しかし、外国人の数を30,000人ぐらいとみると、ドイツ人の数が6,000人、したがってその数は1845年6,000

$+5 \times 4,200 = 27,000$ 人, 1848年 $6,000 + 8 \times 4,200 = 39,600$ 人となる。いずれにしても, 60,000人を越えることはなさそうである。1840年代においてドイツ人人口の変動は6,000人から, 53,600人の間であったということになる。

次に, 月別のチェック・イン, アウトの変化を見ると, おもしろいことに気づく。それは, フランス人の場合, 春と秋の数カ月を除けば, オテル・ガルニを出るものの数が多いと言うことである。この傾向は4年間まったく変わっていない。それに対して外国人の場合, ほとんど4年間をとおしてオテル・ガルニへ入って来るものの数が, つねに出て行くものの数を上回っているということである。これは, 1840年代前半においてパリの人口増が急激であったこと(約90,000人の増加) [B, 72, p. 146] を考えると奇異なことに見える。もちろん, オテルを出たものがパリを出たということではないので, その点では問題はないのであるが, 一日の宿泊者総数は表(3)に見られるように10,000人も増えているのであるから, その増加を外国人が占めたということでもない限りおかしな統計結果であるということになる。確かに外国人の場合宿泊者の割合が増大しているといっても, その数はフランス人の減少分を補完するほどのものではない。

フランス人の宿泊者の伸びが見られる春と秋については, 旅行者や遍歴職人などとの関係で興味深いデータが得られるであろう。春から秋にかけてやってくるものは, 建築労働者や旅行者である。建築労働者はフランスの遍歴職人が圧倒的に優位をもっている分野であり, 彼らがパリで仕事をしていた時期と一致するのかもしれない。旅行者の場合も天候の良い時期と関係しているが, 夏に少ないのは合点がいかないであろう。避暑に出かける人々が多くいた時代ではないので6月から8月まで宿泊者が減るというのは理解に苦しむ。ひょっとすると, 6月から8月まで農村部で小麦の刈り取りや葡萄の摘みとり⁽³⁸⁾にでかける農業労働者の可能性もある。またパリでは多くの子供たちが当時郊外に甲子に出されていた [B, 15, p. 224] (その数, 年3,000-4,500人, Laplaige, D., *Sans famille à Paris*, Paris, 1989, p. 57) が, それが特にこの時期に集中していたのかも

しれない。またパリの南にあった南のビセートル (Bicêtre) 刑務所へ護送される囚人も忘れてはならないであろう [B, 15, p225]。仕立屋や、靴職人等はその逆であり秋にやってきて、春に出ていくことになる。その多くをドイツ人などの外国人が占めていたから、外国人の場合秋から冬にかけて宿泊者が増えているのも諾ける。特に10月は入ってくる外国人と出ていく外国人との差がもっとも多い月であり、フランス人に関してもっともその差の多い3月、4月と対照的である。

ちなみにマルクスは1843年10月末にパリにやってきているのだが、その当時のオテルの外国人のチェック・イン、アウトの状況は10月21日171人、206人、22日217人、335人、23日177人、111人、24日204人、146人、25日189人、175人であり、外の月と比べてチェック・インの数は多い(最近グランジョンがマルクスがパリに来たのは10月11日であると断定しているが、むしろ11日以降であることがわかるだけであると思われる。Grandjone, J., *Zu Marx' Aufenthalt in Paris: 11 Oktober 1843-1. Februar 1845, Studien zu Marx' erstem Paris-Aufenthalt und zur Entstehung der Deutsche Ideologie*, Schriften aus dem Karl-Marx-Haus Nr. 43, Trier, 1990, S. 169.)。しかし、マルクスはヴァノー街23番(現在の27番)のルーゲのところへ行っただと思われるのでこの数字には直接関係していない(この問題に関してもグランジョンが詳しく住所をあげているが、充分とはいえない、Grandjone, op. cit.)。警察の報告では「パリはまったくの平穏を享受しつづけている。無秩序もストライキもない。」[A, 1, h] (10月24日)と書かれており、失業者も少なく、仕事も毎日市役所の前での立ちんぼう710人のうち150人くらいありつけた状態であった⁽³⁹⁾。しかし、11月に冬に入ると不穏な季節となる。表(3)に失業率が掲げられているが、夏場は労働者の数も多く、失業者の数も少ないことがわかる。特に11月からは労働者の数は減り、失業率は上昇する。つまり、フランス人のオテルからの流出は、夏場を除いて、失業率の上昇と微妙に関係していることになる。それに対して、外国人はパリで職業がなくなる時期に大量に流入している。その理由は、おそらく外国人の職種が冬場の失業にあまり結び付かない職種であったということと関係しているのかもしれない。

またこうしたパリへの流入の変化についてはシミアン (Simiand) の賃金との相関関係という説がある。これはシュヴァリエも言うように明確に相関関係を見つけることは難しいことである [B, 14, p. 99]。しかし、失業率が高いということは賃金が低いということで、失業率が低いということは賃金が高いということであるから、表でみるように失業率の低い夏、すなわち賃金が高くなる季節は流入の絶対数は増えていることがわかる。したがって、シュヴァリエの「パリの人口流入は賃金の多少による引き付けとは無関係に行われた」 [B, 14, p. 103] という説は全面的に肯定するわけにはいかない。

表(4)からわかることに、オテル・ガルニの規模がある。当時パリにあったオテル・ガルニは5,000以上であるが、その数は毎月違ってくるほど泡沫的なものが数多くあったということがわかる。一軒あたりの宿泊者数は12.3人であり、小さな規模のオテル・ガルニが多かったようである。ちなみに当時のいくつかのオテル・ガルニの部屋代を見ると表(5)のようなものであった。19番の建物をみると、全体がオテル・ガルニである。注目すべきは2階の部屋は月340フランもするのに、4階の部屋は45フランで、その差が8倍もあることである。部屋数は階数による格付けは別として2階4室、3階12室、4階22室で、部屋数からして平均よりもかなり大きいということが出来る。オテル・ガルニと一口で言ってもその格は千差万別であったということになる。ヴァノー街でも新しくできた通りで、すこし格のおちる地域にはオテル・ガルニは多い。その部屋代をみると最低は10フラン最高は400フランである。しかし、これらのオテル・ガルニも平均以上の部屋数をもっているし、部屋代も平均して高い。このヴァノー街は、パリでもかなり高級な地区に属しているのだから、水平的な地理から言えば、貧困とかけ離れているが、しかし垂直的な地理からみると上の階に行けば、たとえその地区が高級だとしてもかなり貧しい人々が住んでいたことはわかる。

もっとも貧しいオテル・ガルニに関してシュヴァリエは次のような引用をあげている。「パリにおいてのみ、ひどく貧しい人々がその主人に大金を払う特殊な宿を見つけることができる。一月10フランで夫婦、子供たちのいる家族が8

フィート平方の部屋で暮らすことなる。そこには、ひとかかえのふとんのおかれたがたがたのベッドがひとつあるだけである。独身者は、30か40のベッドのひとつの使用料に月6フラン支払っている。——もし支払いができなくなれば、主人はロッカーの中の衣類をいくつか取り上げ貧しい住居人は法的手続きをふむこともなく強制的に叩きだされる」(*Nouveau tableaux de Paris*, 1828, [B, 15, p. 228])。おそらくヴァノー街のような比較的高級なオテル・ガルニではこういうことはなかったであろう。

オテル・ガルニにもいくつかの種類があった。ガルニ・スペシオ (Speciaux) と言われているものは、特殊の職業のものにのみ貸すガルニで、たとえばリムーザンの建築労働者のための専用のガルニの場合、9区にあり月5-8フランで泊まれた [B, 87, a, p. 980]。また靴屋の場合4区にあり、月5-8フラン、家具職人の場合8区にあった [B, 87, a, p. 981]。第二のガルニは月払いのガルニ・

表(5) ヴァノー街のオテル・ガルニの部屋代の例 [A, 2, a]

		部 屋 代 (f-フラン)							
19 番	2 階	340f	230f	220f	150f				
	3 階	150f	100f	180f	120f	220f	150f	220f	150f
		220f	150f	180f	120f				
	4 階	70f	45f	110f	75f	110f	75f	80f	55f
		120f	80f	100f	70f				
5 階	120f	80f	160f	110f	160f	110f	150f	100f	
	140f	95f							
57 番	2 階	60f	30f	90f	41f	160f	80f		
	3 階	60f	30f	90f	41f	160f	80f	140f	70f
		60f	30f	120f	60f	130f	61f	60f	30f
	4 階	70f	35f	70f	31f	80f	40f	90f	45f
		140f	70f	60f	30f	40f	20f	50f	25f
5 階	50f	25f							
59 番	2 階	70f	40f	120f	60f	120f	65f		
	3 階	70f	35f	140f	60f	110f	60f	80f	45f
		100f	55f	230f	145f	150f	95f		

オー・モワ (au mois) で、一般的なガルニである。これには上はエレガンスなものから、下は最悪なものまで千差万別であった [B, 87, a, p. 981]。第三のガルニは一泊だけのガルニ・ア・ラ・ニュイ (à la nuit) で、パリのもっとも危険な階級が泊まる宿である。職業は、日雇い、紙屑拾い、売春婦などである [B, 87, a, p. 981]。この手の宿は、主として6区、7区のレ・アール (Les Halle) の周辺、とりわけサンドニ通りである [B, 87, a, p. 952]。

次に、移動する人口の導出方法としてヴィザの発行、労働許可証の発行が考えられる。ヴィザは警察の発行であり、発行を要求するものは警察で届けをださなければならない [B, 79, p. 1]。しかしそうした届けのまとまったものは現在パリのどこにも残されてはいない。まだ当時の文献から、1836年から1841年にかけてパリに到着した労働者の到着ヴィザは、62,000人、年間に直すと10,300人、出発のヴィザは83,000人、年間に直すと13,800人ということがわかる。

一方労働許可証の方は152,000人で、年間に直すと25,300人とされている [B, 17, p. 729]。このヴィザにはフランス人も含まれているので、この中で外国人の比率を1/8とすると外国人労働者の到着は1,300人、出発は1,700人ということになる。また労働許可証の発行者にしめる外国人は、3,200人ということになる。このうち単純にドイツ人を20%から25%と考えると、到着で260-325人、出発で340人から425人、労働許可証の発行で640人から800人という結果がえられる。しかしこれは比較的長期の滞在の労働者であるから、短期のもの及び労働者以外の人々はその数倍から数十倍ぐらいは到着、出発していたと思える。とするとドイツ人は1,000人から5,000人単位で毎年パリを訪れ、それと同規模でパリを発っていたということになる。この値は、すでに検討した年の変化の数字と照応した値とも言えよう。しかし、実際には1,000人から2,000人の規模だったのではないかと思われる。つまり1848年の統計で判明している外国人の出発ヴィザをみると2月革命のときは別として（このときは日平均200人）、一日平均42人が出発ヴィザをとっていることがわかり、これから、年全体を割り出すと15,885人の外国人が出発したということにな

り、流入も同等にいたとすれば、そのうちのドイツ人が3,177人から3,971人となり、ドイツ人の人口が増えた1840年代後半からみて、1840年代前半は1,000人から2,000人がいいところであろう。

1848年2月革命時は、外国人、とくにドイツ人の流出は激しくなる。流入を無視して、流出だけとりあげても日平均5倍の人口が流出したことになる。単純に年計算すると、ドイツ人だけで15,000人が流出したわけである。もちろん流入もある程度あるであろうから流入を4,000人ぐらいとして計算しても、11,000人ぐらいのドイツ人がこの時ドイツへ帰ったということになる。このことは、2月革命以後のドイツ人の流出と、1851年のセーヌ県でのドイツ人人口13,584人を証明する数字となる。1848年2月革命までのドイツ人人口を知るためには、13,584人に1848年革命後流出したドイツ人を加えてやればいいことになる。もちろんこの場合、1849年ドイツでの革命失敗による再流入を無視している（その理由は、革命以後フランス政府は危険な外国人をパリに居住させることを嫌ったからである。⁽⁴⁰⁾）そうすると $11,000人 \times 2 + 13,584人 = 35,584人$ という結果が得られる。これはおそらく穏当な線であろう。

さて以上の結果からグランジョンの評価を検討しよう。グランジョンが大目の数字を出したのは、彼が1840年代のドイツ人人口の伸びをかなり高く評価しているからである。また、当時の公的記録をやや低めにみつもり、逆に当時のドイツ人の見解を強く支持しつつ、ドイツ人人口がとりわけ1840年代に飛躍的に伸びたということを強調し過ぎたためといえよう。実際には、上記の検討からわかるようにそれほどドイツ人の人口がいたとも思われない。おそらく、シーダーの人口の検討値の方がより正確であったのではないのであろうか。

(3) パリのドイツ人の職業、居住分布

ドイツ人コロニーを形成する人々の職業と彼らの居住の分布がどうなっているかということは、パリの社会での彼らの立場を知る上に重要なことである。

まずパリの全体の様子から、貧しい地域を確定することにする。パリは、場

所によって人口密度や、生活水準にかなりの相違があった。人口が急激に上昇した地区は、地図(2)をみるとわかるように、1区、2区、5区、8区でセーヌ右岸で北西から北東にかけての地域である。しかし、1区、2区、8区にはまだ未開拓の地域があり(一人当りの居住面積83㎡)、人口密度からいうとむしろ人口が上昇していない地域ということになる。人口密度の高い地域は、地図(3)からわかるように3区、4区(一人当りの居住面積12㎡)、5区、6区、7区、9区、そのなかでも7区のアルシ(Arcis)(一人当りの居住面積7㎡ [B, 17, p. 719])である。これらの地域の住民は、徐々にそれ以外の地域、郊外へと移動しつつあり、それにしたがって北西から北東の地域の人口の上昇がはじまっている。

生活水準の水平的分布を住居の価格から分析すると(地図(4))、相対的に高い地域1区、2区、3区、4区、10区、11区、それもセーヌ沿いの中央部であることがわかる。つまり、人口が急上昇している地域で貧しい地区は、1区、2区の北部、5区、8区ということになる。また人口密度が高いにもかかわらず、住居の価格が低い地域は4区、5区、6区、7区、9区であり、これらの地域も貧しい地域であることがわかる。シュヴァリエは1840年代の区別の貧民の数を出しているが、それによると貧民の数が多い地域は、1区、5区、6区、8区、9区、10区、11区、12区であり、特に8区、12区は10,000人を越している [B, 15, p. 238]。ドマールは選挙人(300フラン以上の税金)の名簿から1,000フランを越えるブルジョアのいる地域を示しているが、こうしたブルジョアの少ない地域をあげると4区、6区、7区、8区、9区、12区となっている [B, 20, p. 35]。これらを総合すると、パリでとりわけ貧しい地域は、4区、5区、6区、7区、8区、9区であることがわかる。これらはセーヌ右岸の東側部分である。

商工会議所の1847-48年の調査によると、パリの12区別の主要生産物は以下の具合であった。1区、車体と馬具、2区、車体、馬具、チョコレートなどの食料品、4区、靴、衣類、食料品、5区、馬具、機械製品、綿、糸、楽器(特にピアノ)、陶器、金箔、6区、パリの小間物、傘、扇子、財布 雑貨、宝石など、7区、金属、宝石、ブロンズ、8区、建築、家具、ビール醸造、砂糖精製、紙、9区、商業、10区、装飾品、車体、刺繍、11区、印刷、彫刻、紙、12区、皮革、

ビール醸造 [B, 87, a, p. 45]。パリの就業者の人口からみると、もっとも多いのが衣類に従事するもので 119,280 人、次が建築 45,664 人、家具 41,897 人の順であった [B, 87, a, p. 38]。また各産業に雇用されている労働者の数からみると、建築、繊維、金属は多く（それでも平均は 10 人以下であるが）、衣類、家具は少なかった。仕立屋、靴屋に関しては、一人労働者を雇っているか、あるいは一人も雇っていないという場合が圧倒的で、非常に零細的状态であった [B, 87, a, p. 37]。賃金ということについて見ると、比較的高い職種は、印刷、紙、貴金属、宝石で、日当 4fr ぐらい、家具は中ぐらいで 3fr90 で、もっとも低いのが衣類繊維、衣類で 3fr42, 3fr34 であった。さらにこの中で、仕立屋は 3fr60 とややよく、もっとも低いのは靴屋で 2fr95 であった [B, 87, a, p. 49]。労働者の教育レベルに関して、職種によって大きな違いがあった。読み書き能力という点から言えば、印刷の 97% を筆頭に、貴金属、小間物、食料、建築、家具 (90%)、衣類 (88%) という順序であり、賃金とはかならずしも照応していないことにきづく [B, 87, a, p. 68]。いずれにせよ、すでにこの当時かなり高い識字率であったことがわかる。

以上のパリの様子を参考にしながら、ドイツ人の居住分布をみていくことにする。⁽⁴¹⁾ドイツ人の職業で特に多いのが靴屋、仕立屋、家具職人であった。すなわちドイツ人の職種はパリでもっとも一般的な職種であった。パリではいずれの職種も当時一定の地域に固まって生活していたので、こうした職種に該当する地域を分析すれば、それがドイツ人の居住分布を示すことにもなるはずである。これらの職業はセーヌ右岸の東部、すなわちパリでもっとも貧しい 4, 5, 6, 8 区に固まっていた。1847-48 年の統計では、仕立屋は 4 区 418 人、靴屋は 4 区 198 人、5 区 180 人、6 区 206、家具職人 8 区 267 人という具合であった [B, 87, a, p. 962]。ベルンシュタインが 3 区のジャン・ジャック・ルソー通りに読書クラブをつくったのも、「パリのドイツ人はかなり散らばっており、多くは都市の端、すなわち遠いフォーブル・サン・タントワヌからトロヌ広場（現在のナシオン広場）あたりにすんでいた」 [B, 12, S. 349] からであった。

仕立屋の居住地域は、4 区のサント・ノレ、アール・セク、サンジェルマ

ン・ロセロワ (Saint Germain l'Auxerrois), 5 区のモントルグイユ (Montorgueil), 2 区のリシュリュール, ブルス (Bourse) のあたりということである [B, 14, p. 121]。これらの地域は人口密度も高く, 貧しい地域である。もっと通りを限定して行くと, リシエ (2 区) (Richer) 通り 106 人, サントノレ通り (1, 2, 3, 4 区) 96 人, ヌーヴ・デ・プチ・シャン (1, 2, 3 区) 通り 61 人, ヴィヴィエンヌ (2, 3 区) 通り 58 人といった具合であった [B, 87, a, p. 287]。特に 4 区にはドイツ人のたまり場であった居酒屋クレーガーがあり, 2 区にはやはりドイツ人の利用したカフェ・フォアがあった。さらにリシュリュール通りにはシュレジンガーの出版者, カフェ・ドイッチェ, ドイツ人のお偉方専用のホテルなどがあり, その隣の筋のヴィヴィエンヌ通り (2, 3 区) には, ミニドイツ人コロニーがあった。このコロニーにはドイツ人の両替商, 肉屋, 床屋, 管理人, 靴屋, 仕立屋などが住んでいたと言われている [B, 35, S. 90]。また, クロワ・デ・プチ・シャン (Croix-des-Petits-Champs) 通り (3, 4 区), ボン・ザンファン通り (2, 4 区) [B, 86, S. 22] などもドイツ人の多い地区であった。ボン・ザンファンの居酒屋シェルツァーは 1852 年に政治的陰謀の罪で警察に逮捕されている [A, 1, d, e]。またそのボン・ザンファン通りに 1 番には 1851 年にパリのドイツ人の結社「人民同盟」(Ligue des peuples) があった [A, 1, n] があった。『フォアヴェルツ』の社屋があったのも, リシュリュール通りの近くニューヴ・プチ・シャン通りと, ムーラン通りの角 (2 区) であった [A, 1, j]。また, 1840 年代のドイツ人仕立て屋の本部はコキリエール (Coquillière) 通り 41 番 (4 区) にあった。

すなわち, ドイツ人の多い地区と仕立屋職人の多い地区はかなり重なっているということが言えるわけである。これらの地区は, 家々が密集しており, 家賃は安く貧しい地域であった。1847-48 年のパリの産業調査によると, 仕立屋はフランス人と外国人との競争で賃金が低く抑えられ, 悲惨であると [B, 87, a, p. 18] 述べられているが, 確かに彼らの住んでいた地域はそれに相当する地域であったといえよう。また彼らは, 思想的にはかなり急進的であったと言われる。当局の調査でも「パリの仕立て屋はすべて共産主義的組織に属している」 [B, 32, p. 181] と報告されているからである。こうした共産主義者の一人とされ

るベック (Beck) は、2, 3 区のモンマルトル通り 64 番に住む仕立屋であった [B, 32, p. 181]。また 1839 年季節社の蜂起で逮捕されたスイス人シュタウブは仕立屋であった [A, 1, p.]。この近くには、ハイネの住んだポワソニエール (Poissonnière) 通り (3 区)、フェネダイやマイスナーが住んだフォーブル・ポワソニエール⁽⁴²⁾ 通り (2 区) もある [B, 55, p. 136]。

次に靴職人をみてみよう。靴職人は服の仕立屋よりも低い賃金で生活していたと言われている [B, 87, a, p. 50]。だからということでもないが、「靴屋の多くは、オテルガルニに住むドイツ人かロレーヌ人であった。」 [B, 87, a, p. 242]。靴屋が集中していた通りは、サントノレ (1, 2, 3, 4 区) 通り 50 人、サンジェルマン・ロセロワ (4 区) 通り 43 人、サン・ドニ (4, 5, 6 区) 通り 31 人、カンカンポワ (4 区) 通り 22 人、サン・ジャック・ド・ラ・ブシュリ (6, 7 区) (Saint Jacques de la Boucherie) 通り 20 人、サン・マルタン (6, 7 区) (Saint Martin) 通り 20 人といった具合であった。靴屋に関しては、6 区のヌーヴ・サン・ローラン (Neuve Saint-Laurent) 通り (現在のヴェルボワ (Vertbois) 通り) も有名で [B, 14, p. 121] あったが、この地区もドイツ人の居住地区の一つであった。特にドイツ系ユダヤ人の共同体が 14 番にあった [B, 44]。

この建物は、ユダヤ人の貧民救済のためにユダヤ共同体が購入したものであった。すでにユダヤ人は「パリのユダヤ人貧民の救済、助成会」をつくっており [B, 71, p. 29]、そのための建物をこの地に求めたのである。パリのユダヤ人について少し見ておくと、その人口は 1840 年において 9,000 人で、1809 年の構成比でいくなれば、外国出身のユダヤ人はその 10% で 900 人くらいということになる。中でもドイツ系のユダヤ人の数は多かった。ユダヤ人の中で商業に携わるものは、ヌーヴ・サン・ローランの周辺、6 区、7 区に集中していた。またユダヤ人の中には、仕立て職人も多くいたが、彼らは、他のドイツ人と同様にリシュリュエ通りからパレ・ロワイヤルに居住していた。ドイツ系ユダヤ人が多くいたのは、サンタ・アヴォワ (Sainte-Avoye)、カンカンポワ (Quincampoix)、ボーブール (Beaubourg)、ブール・ラベ (Bourg l'Abbé) などであった [B, 71, p. 61]。

この通りは長さ224m幅10mの比較的小さな通りであるが1851年にヴェルボワ通りと連結されることにより、現在ではその名は存在しない [B, 6] [B, 44]。この地区は部屋代の総収入、課税額、資産額においてもっと郊外のサン・タントワヌと同じか低く、さらに高級な地区であったヴァノー街に比べても低い。⁽⁴³⁾つまりこの地域はかなり貧しい人々の地域であったと言えよう。「追放者同盟」の重要な人物で、スイスで刷られた『ドイツ青年の叫び声』(*Der Hülferuf des Deutschen Jugend*) 700部をパリで配布する役割を担っていたバウアーは靴職人であり、彼も3区のジュール通り (Jour) 19番に住んでいた [B, 32, p. 179]。⁽⁴⁴⁾

家具職人の多い町は、カンズ・ヴァン (8区) 地区552人、フォーブル・サン・タントワヌ (8区) 地区324人、ポパンクール (8区) (Popincourt) 地区141人、マレー (8区) (Marais) 地区76人 [B, 87, a, p. 102] であった。特にドイツ人は多く、1825年から1830年にかけて大量に流入したといわれる [B, 87, a, p. 106]。

サン・タントワヌは、家具職人の町であった。⁽⁴⁵⁾メルシエは「フォーブル・サン・タントワヌに住む連中には気をつけたまえ。3週間もたつと方々がはがれてしまう事務机を売りつける奴もいる。」とこの町の家具屋に注意を促しているほど有名であった [B, 58, 訳上巻, p. 260]。ドイツ人とこの町については1839年に「フォーブル・サン・タントワヌでは、家具職人がおなじ職業のドイツ人が賃金をさげる原因であるとし、攻めたて虐待している」 [B, 14, p. 223] と報告されておりドイツ人がこの職種についていたことがわかる。家具職人が多い町と言うことは、ドイツ人が多い町と言うことでもある。ドイツの教会もこの地区に接近するが、「不満に満ちた労働者街区サン・タントワヌはとりわけ社会の注目を引き付ける。最近の年次報告 (たとえば1847年) には、キリスト教に対する体制的な反対が蔓延していると書かれてある。」 [B, 93, S. 241] と報告し、容易に近づけない地区であることを認識する。

この地区についてユゴーは『レ・ミゼラブル』の中で、「フォーブル・サン・タントワヌは民衆の貯水池である。革命の動揺でそこに割れ目ができると、そこから民衆の主張が流れ出す。」 (辻稔訳, 講談社, 1987年, p. 349) と言っている。

るが、それはこの地区の職種にも関係している。1848年革命で重要な役割を果たす。それはこの地区の家具職人の居住形態が関係しているからであり、ドイツ人の共産主義者は仕立屋について家具職人に多いからである。

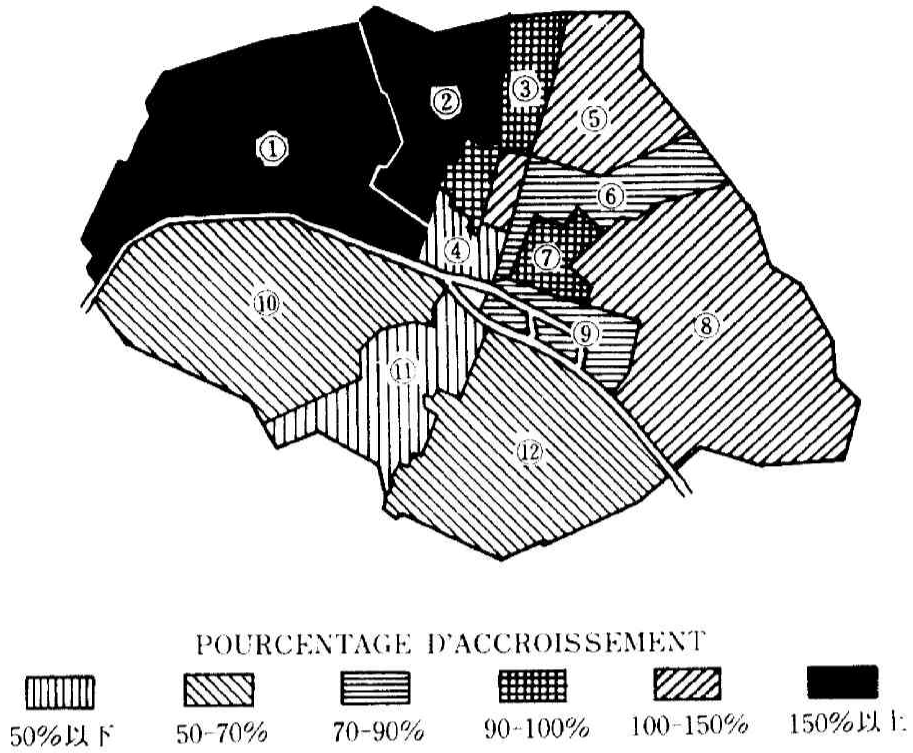
18世紀のパリの暴力地図を作り上げたファルジュ (Farge) とズイスベール (Zysberg) は、この「街区には、親方と職人とがきわめて高い密度で居住している」[B, 24, p. 172] と述べている。これは親方と職人との階級闘争を示しており、それが革命や蜂起につながっていったと考えられるからである。親方と職人とが常に対立関係にあったとすれば、おそらくそうしたことは言えるであろうが、断定にはまだ早い。むしろそれにもかかわらずか、いやそれ故にか職人と親方との関係は密である場合もあり、単純にそうした仮説はなりたないであろう。⁽⁴⁶⁾

オーディガンヌ (Audiganne) は家具職人について次のように述べている。「一般的に家具職人はたった1人あるいは1人か2人の労働者とともに部屋で仕事をする。フォーブル・サン・タントワヌの多くの通りにはこうした種類のアトリエが建物の何階(又、建物の奥の通りに面していない建物の何階)もを占めている。1848年の調査の際1,915人の親方のうち10人以上の労働者を抱えていたのは178人しかおらず、844人は2-10人、448人は1人、445人はたった1人であった。」[B, 3, S. 529] いずれにしろ家具職人のアトリエは、小さなものであり、親方と職人は密にも敵対関係にもなりえた状況であったことは確かである。

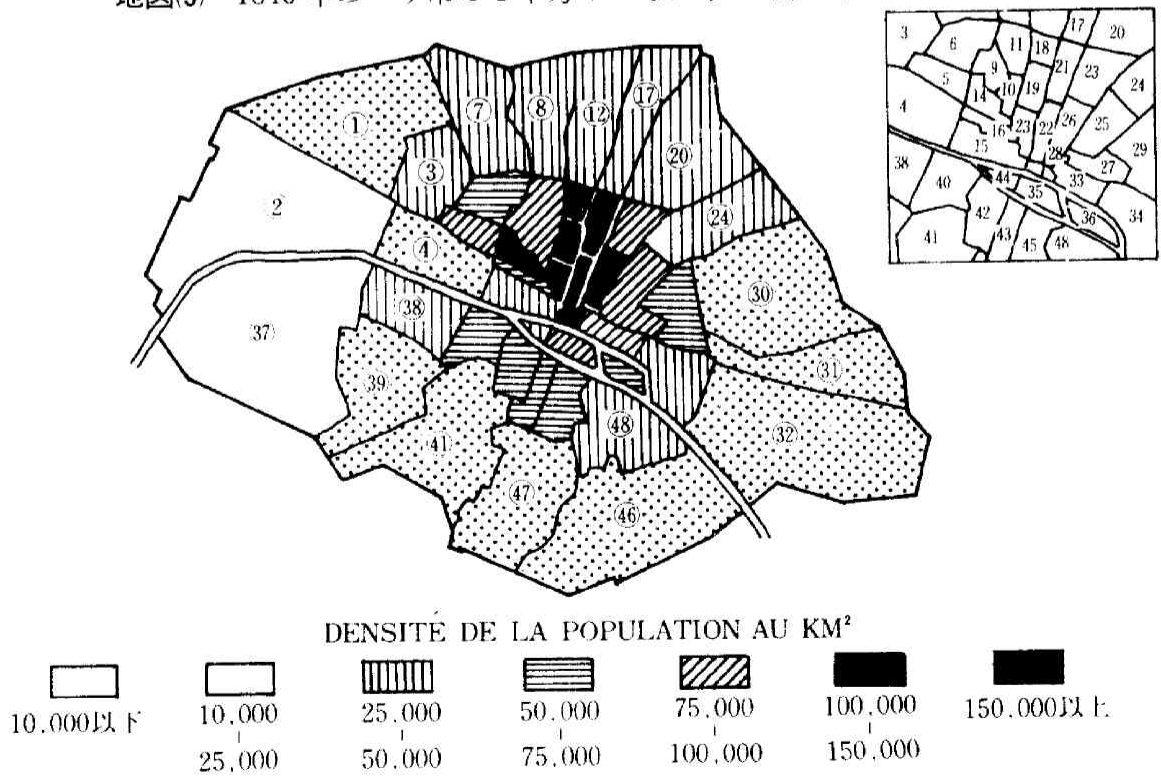
フォーブル・サン・タントワヌ通りの住居をみると、部屋が比較的小さく、部屋代も1,000フランを越えるような高級な部屋はなく、200フランから500フランまでの部屋が多い。ドマール (Daumard) はパリの家族のうち、72%が200フラン以上の部屋にすんでいると述べているので(1846年 [B, 20, p. 8]), 一般的な部屋ということになる。また部屋の数も細かく分かれている。これを見てもわかるようにこの地区にはブルジョアの高級住宅はほとんどなかったということが判明する [A, 2, c, e]。

そのほか、ドイツ人が比較的多い地域に11区から12区のサン・マルセルに

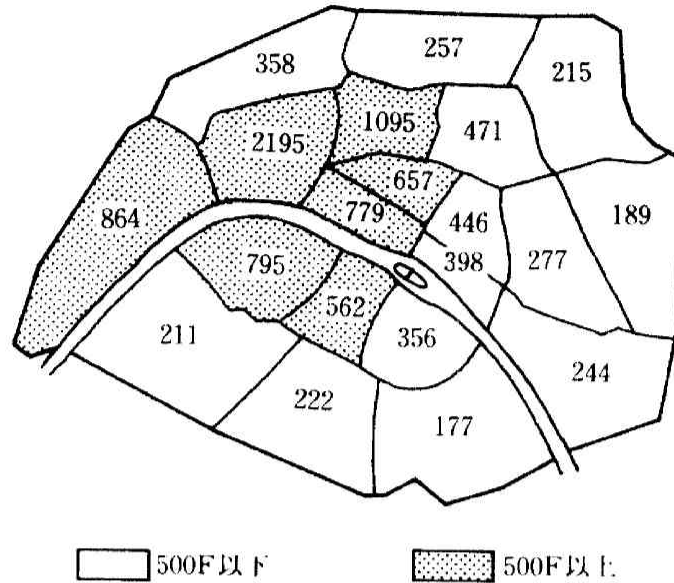
地図(2) 1840年から1846年にかけてのパリ市の12区別人口上昇率



地図(3) 1846年のパリ市の1平方キロあたりの地区別人口密度(人)



地図(4) 19世紀後半のパリ市の20区別の年間賃賃価格



かけての地域があった。この地域は鉄道が発達する前 1830 年代にドイツ人が住み着いていた地域で、1830 年代から 40 年代にかけての労働運動の中で重要な役割を演じた人物が住んでいた地域でもあった。1839 年季節社の蜂起で逮捕されたシャパーの場合、11 区のジャコブ通り 16 番、54 番サン・タンドレ (Saint André) 通りのホテル・ブリュージュ (Brugges) に滞在していたことがわかっている [A, 1, f]。しかし、当時のブランキの押収資料に、ブランキの知人の住所録があったが、シャパーの名前はない。そこに載っているドイツ人らしき人物をさぐると数人でアスフェルト (Asphelt) (ヌーヴ・サン・ロク (Neuve Saint Roch) (2 区) 43 番), アドルフ (Adolphe) (サンジエ (Censier) (12 区) 37 番), バッヘン (Bachen) (トラシー (Tracy) 通り (6 区) 2 b i s) にすぎない [A, 1, u]。この蜂起で怪我をしたドイツ人には飾り紐職人シュレシンガー (Schlesinger) (1812-?) (サンマルタン通り 125 番) [A, 1, t], 死亡したドイツ人には差替え工アルベルト・エンゲルス (1820-39) (ヴィエーユ・エチューヴ (Vieilles Etuves) 通り 8 番) がある [A, 1, s]。しかし、いずれも義人同盟の会員ではない。ブランキとドイツ人、季節社とドイツ人との関係については、いまだにはっきりしていない⁽⁴⁸⁾。またケニス事件の 17 才のなめし工ヘルマンは 12 区のトラヴェルシエール (Traversière) 通り [A, 3] に、クーンは 11 区、21 区のサン・ジャック通りに住

んでいた [A, 1, g]。一方マルクスたちの住んでいた 10 区サン・ジェルマンに關してもエヴェルヴェクが彼らの近くニコール通り (Nicolet), またモンパルナス通りに住んでいた [B, 32, p. 180]。しかしこうしたセーヌ左岸のドイツ人たちは, 1840 年代には主流ではない。

すでにドイツ人の多くは当時のパリ 12 区内部から郊外へとその中心を移しつつあった。1850 年代以降はその状態は顕著となり, ドイツ人用の協会や学校については郊外に建てられることになる。1872 年の統計では, バティニョール, モンマルトの丘, ショーモン (Chaumont) の丘, メニルモンタンなどの人口が増えているが [B, 14, p. 81], まさにこの地区こそドイツ人の多い地域であった。ドイツ人の教会や学校が建設されるのは, ショーモン, モンマルトルの丘にかけての地域, すなわちヴィレットである。東を結ぶストラスブール鉄道ができてから, 特に東駅界わいはドイツ人人口が増えることになった [B, 14, p. 126]。1860 年代の各地域のドイツ人人口は北部のヴィレット 3, 019 人, クリニアンクールとサン・ドニ (パリ郊外) 2, 200 人, サン・マルタン 13, 000-17, 000 人で, 中心街のショゼ・ダンタン 2, 700 人や東部のフォーブル・サン・タントワヌ近辺のロケット (Roquette) 2, 724 人 [B. 69, p. 1028] に比べて圧倒的な人口を持つようになっている。職種は, 区内とちがってかなり落ちる職種が多かった。この地域にやってきたのはヘッセンや南の地域の出身者が多かった。彼らは何の技術もない人々で, ゴミひろい, 掃除夫, マッチ工場などの工場労働者であった。だからカトリック教会は, 彼らのためにミサをドイツ語でおこなったり, ドイツ語を教えたりする学校を建てることになる。

19 世紀後半に見られるドイツ人の郊外への移動も, 19 世紀の末ともなるとさらに大きな変化を受ける。すなわち第 2 世代へ移るとともにフランスへの帰化が増え, ドイツ人の同化と職業上のグレードアップが計られることになる。1900 年にはドイツ人の職種の多くはもはや職人や労働者ではなく, 会社員となっている [B, 82, S. 242]。労働者を輩出する国はドイツからイタリア, ベルギーへと移っている。工場労働者のコロニーであったヴィレットやクリシー, バティニョールにはベルギー人がドイツ人を抜いて大きなコロニーをつくるこ

とになった。この頃にはドイツ経済の復興も計られ、ドイツ人労働者の供給も量から質の時代へと入り、ドイツ人を見る目にもそれまでのような軽蔑的態度からの変化が見られる。こうしてドイツ人コロニーに本来の役目も終わりを迎えてくる。たとえばそのことは1840年代にできた援助協会の発展と衰退を見るとわかる。援助協会は第一次大戦まで活躍するが、その後は衰退していく。その理由はドイツ人労働者の減少であった。

小 括

パリのドイツ人コロニーの実態について最後にまとめることにしよう。本稿では全体を1) ドイツ人コロニーの実態、2) パリのドイツ人人口、3) パリのドイツ人の職業居住分布に分けて分析してきた。この3つの分析から何が導き出せるであろうか。

ドイツ人コロニーの実態については、パリのドイツ人が1840年代パリの中で最大のコロニーを形成し、さらにその他の都市のドイツ人コロニーよりも大きく、しかも影響力があったことを見た。当時のパリには、ドイツの他の都会にもないくらいの優秀なドイツ人の社交会や職人や労働者の巨大なコロニーができ、それらが刺激しあい、出版や労働運動がはぐくまれていった。しかも、それらが祖国ドイツへの自由、統一という点で結び合っていくと、フランスの社会主義その他の国の社会主義運動と呼応しあって、新しい思想を生み出す母胎となりえるほどに成長した。しかし、そうした側面が消えると、パリのドイツ人社交会もコロニーも、パリの同国人の生活改善のためだけの組織にのみ関心が向い、新しい思想を生み出す意欲も失せていく。こうしてパリではドイツ人の労働運動の関心は、労使の対立問題から、フランス人からいかに同国人を守るかという問題へと移っていく。

ドイツ人の人口に関しては、1840年代のパリのドイツ人の人口はピーク時約2-3万人を迎えることを証明した。この3万人という数字も他の都市や地域に比較すると相当な数であり、特にフランスにおける比重では1840年代にはパリの絶対的優位を作り出すことになる。パリへのドイツ人の流れは1848年2

月革命まで続く、しかし革命以後パリでは外国人の流入を制限したために、ドイツ人の多くはパリを捨てロンドンへ移る。これによってパリのドイツ人人口は停滞を迎える。この停滞は、パリのドイツ人の活性をそぐことになる。

ドイツ人労働者の分布を見ることで、ドイツ人コロニーの変化を分析した。1840年代にパリの中心にアトリエを構えたドイツ人職人たちは、同地区に住むフランス人に影響されて社会主義へ接近するが、郊外へコロニーが拡散するにつれてコロニー意識も変化してくる。北部地域のドイツ人コロニーは賃労働者やルンペンプロレタリアートを吸収し、社会意識よりも生活を優先する。そのため社会主義運動よりも援助、教育、布教の方が重要になってくる。やがてフランス人への同化とともに、社会的地位の上昇へと進み、コロニー自体の存続を危うくしてしまう結果となり、ドイツ人コロニー自体の意味が失われる。

こうしたことからみて1840年代のパリはドイツ人にとって非常に重要な意味をもった時代であったことがわかる。フランスの自由、祖国の統一、インターナショナルな社会主義、フランス社会主義の輸入などどれをとってもこの時代であったからこそ意味をもったものが多い。あるドイツ人は「パリのドイツ人」の歌をパンフレットに残している。その一節に次の言葉がある⁽⁴⁹⁾ [B, 22]。

貧困と地下の墓場にいる兄弟のことを考える

しかし、じっくりと待とう

われわれをよびさます決定的な時がくる時を

今こそ諸君ドイツ人よ、祖国へ

ラインを越え、太陽が登り始める

多くのパリに住むドイツ人はこうした期待をもちながら1840年代を過ごしたのであろう。

(注)

(1) パリに到着したドイツ人はまず最初に警察署に行かねばならなかった。「パリに

到着した旅人は、滞在する所轄の警察署にパスを渡し仮の証明書 (Bulletin) をもらう。旅人はこの仮証明書を警視庁 (日曜日以外は9時から16時まで開いている) に見せ、短期滞在の場合は通行ヴィザ、長期滞在の場合滞在証をもらい、出発のときパスと交換しなければならない。」 [B, 63, S. 37]

- (2) 当時、ドイツ人旅行者が読んだ観光案内書を一覽しておこう。とりわけ当時良く売っていたのが、ライヒハルト (Reichhard, 仏語版 Richard) のガイドである [B, 75]。このガイドは近代的ガイドの先駆けと言われている。ドイツ語とフランス語で出版され、なんと57版まで版を重ねている。1836年12月27日のムニエ (Meunier) 事件の時も、押収資料にこの旅行案内書が入っていた [A, l, r]。パリで出版されたドイツ人向けの案内書には “Der Fremdenführen in Paris” hrsg. Grimm と Börnstein 編の “Guide pittoresque de l'étranger dans Paris et des environs” であった。その他のパリに関する旅行案内書を知るには、ランボームの書誌が便利である [B, 49]。これには当時出版されたパリに関する各国語の案内書があげられている。ドイツ語のものをみると1830年代には7冊、1840年代には9冊、1850年代には12冊があげられている。もちろんこの書誌は不十分である。たとえば、本稿で利用している [B, 13], [B, 36], [B, 47], [B, 63] などは掲載されていないからである。この不足分については文献 [B, 28], [B, 38] を参照。
- (3) パリのドイツ人に関する当時の文献としては、クンツェ [B, 51], デピンク [B, 21], ニーダーマイヤー [B, 62], バンベルガー [B, 69], スタール [B, 85] などがある。最近では、グランジョンとヴェルナーの [B, 35] とグランジョンの編集したシュトレールの書簡集の解説 [B, 86] がある。
- (4) アリエスは「古いパリの人々は非常に狭い、非常に制限された小さな世界のまん中で暮らしていた。しかし、それでも毎日変化があったので、満足していた」 [B, 1, p. 130] と当時の心性について述べているが、ドイツ人コロニーにも同じことが言えるであろう。
- (5) 職人の遍歴の教科書であるグリュンの本によると、職人が仕事を見つける場合職人宿 (Herberge) で先輩職人や親方の面接を受けねばならなかった [B, 39, S. 20]。
- (6) そのほか、ルーアーヴル、マルセーユ、リヨンにもこうした援助協会が存在した。ルーアーヴルの場合、アメリカへの出発を待つ貧しいドイツ人が多く、バイエルン領事館は移民者のために援助を行った。マルセーユでも援助協会ができたが、1878年のことで、リヨンでは1864年にバイエルン、ヴェルテンベルクなどが共同で援助協会を作っている [B, 57, SS. 372-377]。
- (7) ロンドンでは、すでに1845年10月15日にダルストン (Dalston) 通りにドイツ人専用の病院が設立されている [B, 74, S. 36]。
- (8) たとえば、ウール県の1842年の援助金のリストを見ると、ポーランド人が16人おり、その構成比は、士官13名、下士官2名、兵士1名となっている [Archives

- Départementales de l' Eure, 4M21]。これは、亡命者の多くが軍関係で、しかも軍の中でも責任のあるものが多く亡命してきたことを意味している。
- (9) すでに 1838 年にポーランド人専用の図書館を持つにいたり、現在のサン・ルイ島にある図書館は 1853 年以後のものである [B, 73]。
- (10) スイスのドイツ人の活動とフランスとの関係については、次稿「1840 年代フランスにおけるドイツ人人口の動態—(3)特に西フランスに関して(上)」(『商経論叢』28 巻 3 号, 1993 年) で詳しく言及する。
- (11) アシュトン は、1820 年以後のドイツ人の動きを取り扱っているが、1848 年以前にドイツ人がロンドンへ来なかった理由として、コミュニケーションの問題をあげている。それにはドイツの労働者との関係だけではなく、革命が起きた場合の地理的問題も含まれている [B, 2, p. 35]。
- (12) アメリカへのドイツ人の移民についての文献は、すでに前稿 [B, 100] で言及しているが、邦語では [B, 106] を参照するとよい。
- (13) ドイツ人労働者の組織化について、またその後の発展についてのわが国での研究は、良知力 [B, 108] [B, 109] [B, 110] 広松渉 [B, 107], 石塚正英 [B, 94] などによって進められてきたが、文書史料に詳しい良知の場合ももっぱらドイツ側の文献を利用していることに特徴がある。
- (14) 西南ドイツの自由派の出版活動の動きと、この祖国同盟との関係については [B, 50] を参照。
- (15) この新聞は、その発行の主旨をプロスペクトゥスで語る。フランスの新聞は非常に狭い視野をもった国民的偏見に満ちている。これらの新聞から外国の人々の未来を真剣に検討することはできない。またドイツの新聞も同様である。そこで、その欠点を克服する新聞を発行すると、『ルモンド』は、国家的利害にとらわれない新聞を意図していた [B, 60]。
- (16) 「仕立て職人博愛協会」の規約にその目的が書かれてある。基本的な目的は、困った時の相互扶助の資金を作ることにあった。組織は, série と section に分かれ、各セクションは最大 20 名の会員で構成される。série は 5 つのセクションから構成され、その上に全体の協会が位置している。組織的には秘密結社と同様の三角形の組織形態が採られているが、各長は選挙によって選ばれる民主的形態を持っている。会員は仕事にありついている 4 月から 7 月、10 月から 1 月までは 15 日置きに 1 フラン、失業する可能性が高いそれ以外の月には 15 日 50 サンチームを会費として納めなければならない。会員が病気になった場合、会の状況によって異なるが、日に 1 フラン 50 サンチームを 3 ヶ月間もらうことができる [A, 1, m]。要するにこの組織は、革命をねらった組織ではない。しかし、この手帳が裁判資料に残されているように政治運動と強い関係をもっていたことも事実である。
- (17) ヘーゲル左派も、当初フェネダイと同様に独仏同盟論を機軸として『独仏年誌』

を出版するが、それが挫折したのちは分解し、『フォアヴェルツ』を中心に労働者との接近をはかる。しかし、やはり十分な成果をあげることはできなかった。拙稿 [B, 99] [B, 101] [B, 102] [B, 104] 参照。

(18) 季節社関連の史料は、CC723 から CC761 の番号の史料の中にある。シャパーの史料は、CC739 は No. 182 と番号をふされたものである。当時の蜂起等に関する史料状況については、Charon Bordas, J., *Cour des Pairs procès politiques III, La Monarchie de Juillet, Inventaire des articles CC 671 à 852*, Paris, 1984. または [B, 33] を参照のこと。

(19) ドイツ側の史料を使ってパリの社会主義者を研究した文献に良知力の [B, 108] がある。フランス側の史料を使った研究はシーダー [B, 81], グランジョン [B, 30] [B, 31] [B, 32] [B, 33] [B, 34] [B, 35] がある。最近ではメルツァーの研究もある [B, 56]。

(20) 西南ドイツ派については、さしあたり [B, 48] 参照のこと。

(21) ルアーヴルからアメリカへ渡ったドイツ人の資料は、ルーアンの県立アルシーヴにも、ルアーヴルの市立アルシーヴにも残されていない。しかし、パリに 1837-39 年の資料が残されている。当時の警察が調べたもので、フランスの主要な港の報告が残っている。しかし、報告はまちまちで統一性に欠けている。しかし、少なくとも 1837-39 年の状況はわかる [A, 1, 1]。それによると以下のとおりである。

	フランス人	アメリカ人	ドイツ人	全 体
1837 年	1, 376	503	5, 527	8, 331
1838 年	744	444	2, 677	4, 122
1839 年	1, 216	588	7, 800	10, 110
総 計	3, 336	1, 428	16, 004	

これをみると、ドイツ人の数は 10,000 に達していないものの、全体の半分以上を占めていることがわかる。毎年のように大量のドイツ人がルアーヴルへやって来ていたわけである。すでにこの資料の一部は、ベルチエ・ド・ソーヴィニによって紹介されている [B, 9, p. 160]。

(22) パリの「ドイツ歴史研究所」(Deutsches Historisches Institut Paris) を中心に、最近パリのドイツ人の生活についての研究が進んでいる。おもにその機関誌 *Francia* に発表されているが、この機関はフランスとの共同研究をいくつか主催している。たとえば [B, 35]。

(23) フォンド・ギゾーの閲覧は、現在許可 (Autorisation) 制になっている。快く閲覧を許可してくださったミシェル・リシャール (Michel Richard) 氏に感謝したい。

(24) 居酒屋を中心として人々の交流と社会運動との関係は、ソシアビリテ (Sociabilité) としての研究が進められている。これについては喜安 [B, 97] を参照。

- (25) こうした居酒屋は各都市にあった。ストラスブールの「レブビューネル」についてヴォルフムは語っている。「私はその晩そこで何人かのドイツ人亡命者とあった。みんなビールをよく飲んでいて。すでに新聞で知っていたフェネダイがしばしば演説していた。」[B, 34, S. 251]
- (26) カフェに関してもフランスの都市に同じ様なものがあった。マルセーユのユグリー (Hugly), リヨンのジャン・ミューラー (Jean Müller), フリッツ (Fritz), ビール (Beel), ナントのカルミハエル (Carmichael), ディジョンのペテルソン (Peterson) がそうであった [B, 32, p. 181]。
- (27) 1836年ミュルーズのアイヒホルン (Eichhorn) とキュルツ (Kurtz) のところで押収された資料の中には、パリで印刷されたドイツ語の本がいくつかある。そこからドイツ系の出版者が判明する [A, 1, q]。
- (28) 読書クラブに関しては、パラン・ラルデュの研究 [B, 66] [B, 67] があるが、ドイツ人のクラブに関しては言及されていない。これについては、未公開の論文に次の文献があるという。Helga, Jeanblanc, *La Vie des gens du livre*, Ms., 1984 [B, 86, S. 33]。またドイツ人の研究としてはフォスの18世紀のパリの読書クラブの研究がある [B, 91]。これによると18世紀のパリには、フリーデル (Friedel) (1753-86) のドイツ人読書クラブがサン・トノレとリシュリュエ通りの角にあったようである [B, 91, S. 466]。フォスは読書クラブの持つインテリ相互のソシアビリテについて語っているが、著者はすでにトリーアにおける学校、読書クラブ、カジノ等のソシアビリテについて言及したことがある [B, 98]。
- (29) コレフは、フランスで医療を開始するために、フランス政府から調査を受けている [A, 1, o]。当時外国での医療に免許が必要であったのか、そうでなかったのかについて筆者はまだ知るに至っていない。
- (30) マイנטツァーに関してはトリーアの医師グロスが略伝を書いている。これによると、彼はパリで *Gazette musicale de Paris* や *National* に記事を書きながら、一方で労働者のために歌の学校をつくった。その学校には一時期3,000人の労働者がいたほどであった [B, 37, S. 89]。
- (31) アルザス地域からのパリへの移動については拙稿 [B, 100, p. 103] の表(3)をみると、1841-46年のアルザス、ロレーヌ地域の移動の様子がわかる。これによるとかなりの数が流出している。
- (32) もっとも最近のグロッサーの整理によると30,000人から60,000人という数字が出ている [B, 38, S. 221]。またキリスト教徒の信者数の調査からすると、40,000人から60,000人という数字が出ている [B, 93, S. 289]
- (33) フォアメルツの時期に援助金をもらっているのは、多くはポーランド人、スペイン人、イタリア人であり、ドイツ人は少なかった。ストラスブールにおいても、1841年わずか5人であった [B, 100, p. 107]。

- (34) 喜安は、ホテルを5段階に分けて、下から4番目、5番目をオテル・ガルニとしているが [B, 96, p. 143], ドイツ人の観光案内書よるとすべてオテルはオテル・ガルニである。また警察署の史料の Hôtel Meuble にも貧民のオテル・ガルニとの区別はない。
- (35) クーザンの本には、1820年代の欲望うごめくオテル・ガルニの様子が描かれている。当時の読者はこうしたオテル・ガルニの生活に興味を引かれたようである [B, 19]。
- (36) 当時のドイツ人用の観光案内書のオテル・ガルニのリストを見ると、1区のリヴォリ通り、2区のリシュリュエ通り、4区のサントノレ通りに集中していることがわかる。リシュリュエ通りは特に多く、他にも13のオテルがあった [B, 63, p. 377]。
- (37) 郊外のヴェルサイユの史料にも、セーヌ県の外国人を知る手がかりはなかった。これについては、次稿「1840年代フランスにおけるドイツ人人口の動態—(3)特に西フランスに関して(下)」(『商経論叢』29巻1号, 1993年)で詳しく言及する。
- (38) 商工会議所の統計によると、靴職人、仕立屋、家具職人とも暇な時期 (La Saison Morte) は1, 2, 3, 7, 8月であった。いずれにしても、春と夏は移動が激しい時期ということになる [B, 87, a, p. 77]
- (39) 逆にマルクスがパリを追放されたと言われている1845年2月1日の報告には、「パリはまったく平穏であり、無秩序も、争乱もない。」[A, 1, h]と述べられている。
- (40) 1849年には、フランス国境近くで起こっている不安を解消するために、問題のドイツ人たちのパリへの流入を防ぎ、西フランスへ移住させようとする。これについては、次稿「1840年代フランスにおけるドイツ人人口の動態—(3)特に西フランスに関して(中)」(『商経論叢』28巻4号, 1993年)で詳しく言及する。
- (41) パリにきたドイツ人は、観光案内書に出ているオテル・ガルニに泊まるか、知人の家に世話になるか、知人に格安のオテル・ガルニを紹介してもらうか、そうでなければ、*Journal des petits affiches* に毎日出ている部屋を借りることになる [B, 63, S. 370]。
- (42) 1860年代になってもこの仕立屋の職業分布はかわっていない。あいかわらず、ヴィヴィエヌ、パレ・ロワイヤル、レ・アールといった地域に多くが住んでいる [B, 87, b, p. 308]。この統計の閲覧については、日本女子大学の喜安氏にお世話いただいた結果である。ここに謝意を表したい。
- (43) ここで使用する史料は、DQ18は不動産の台帳で、DP4は賃貸を示す土地台帳である。これによって、当時の建物の資産価値、賃貸料などが判明する。
- (44) 1860年代になると靴職人は郊外にも多く進出する。パティニョール、ラ・ヴィレットなどに靴屋が集中するようになる [B, 87, b, p. 255]。
- (45) 家具職人の居住地域は、1860年代になっても、サン・タントワヌ地区のロケット、サンテ・マルゲリット (Sainte Marguerite) に集中している [B, 87, b, p. 169]。

- (46) 西岡の文献 [B, 105] は邦語でオテル・ガルニを初めて本格的に分析したものであるが、西岡はそこで「そうしたガルニの史料から見る限り、両方の間にはかなりパーソナルで良好な関係が保たれていたと結論される。労使間の懸隔や社会的な対立は大きなものではなかったと考えられるのである。」[B, 105, p. 44] と主張している。
- (47) この年の11月8日からジャコブ通り16番にプルドンがシュアール (Suard) 奨学生として下宿することになる。これが偶然か、何等かの関係があるのか不明である。
- (48) グランジョンは、義人同盟とブランキとの関係に対する古典的命題に疑問を投げかけている。彼は当時の義人同盟の主要メンバーを調べ、季節社との関係を追跡する。その結果、関係するのはシャパーだけであり、そのシャパーと季節社との関係を認めることはできないという結論に達している [B, 29, pp. 180-184]。たしかに、季節社の蜂起の関係資料にはシャパーの膨大な押収資料があるが、ほかの膨大な押収資料の多くと同様季節社との関係を決定づけるものではない。
- (49) この歌はパンフレットとして出回ったものであり、作者が不明である。モイラーが『パリのドイツ人の詩と考え』[B, 54] という作品を出しているが、これと関係あるかどうかは不明である。

引用文献一覧

- 引用はすべて文献番号による。例 [A, 1, a] はアルヒーフ史料(1)の a を指す。
- ページについては日本語、フランス語、英語は p, ドイツ語は S で表記する。

A. アルヒーフ史料

(1) Archives Nationales

- a. 42AP57 Fonds Guizot, Rapports de la Préfecture de police 1843-46
- b. BB⁸ 1408 Renseignements sur une société secrète formée à Paris en 1839 ou 1840
- c. BB⁸ 1796 Complot communiste allemand, mars-novembre, 1852.
- d. BB²⁴ 405-8 Complot communiste allemand, mars-novembre, 1852 N° 2667
- e. BB²⁴ 419-430 Association intitulée "Alliance des communistes" organisée en France, en 1851
- f. CC739 Attentat des 12 et 13 mai 1839, Inculpés ayant fait l'objet d'un nonlieu, N° 182, Dossier Karl Schapper
- g. CC783 Attentat du 13 Septembre 1841, N° 23, Dossier Kuhn Michael
- h. F⁷ 3884-3893 Bulletin de Paris, Préfecture de Police. Mutations des Françaises et étrangers. 1830-46

- i. F^v 12180^a à 12185^b
Rapports de la préfecture de police , passeports, permis de séjour, 1832-1852
 - j. F¹⁸ 425 Dossier Vorwärts (1843-45)
 - k. F¹⁸ 337 Dossier Deutsche Pariser Journal (1846)
 - l. F^v 12377 Etats des passages tant français qu'étrangers pour les Deux Amériques pendant chacune des trois dernières années
 - m. BB¹⁸ 1766 Règlement de la société philanthropique des ouvriers tailleurs
 - n. BB³⁰ 392^v Demande par le gouvernement Badois d'une liste des affiliés allemands à la société secrète, La Ligue des Peuples
 - o. BB¹⁷ A118 Dossier 9, Requête du Dr. Koreff pour être admis à exercer la médecine en France
 - p. CC740 Attentat des 12 et 13 mai 1839, Inculpés ayant fait l'objet d'un nonlieu N° 208, Staub, Henry
 - q. BB¹⁸ 1364 Découverte à Mulhouse d'une société secrète dénommée Löwenfels
 - r. CC718 Attentat du 27 décembre 1836, Affaire Meunier, pièces saisies
 - s. CC723 Attentat des 12 et 13 mai 1839, Information générale, Engels, Albert
 - t. CC743 Attentat des 12 et 13 mai 1839, Inculpés ayant fait l'objet d'un nonlieu N° 278. Schlesinger, Bernard
 - u. CC728 Attentat des 12 et 13 mai 1839, Accusés de la deuxième série. N° 462. Listes des adresses trouvées chez Blanqui
- (2) Archives Départementales et de la ville de Paris
- a. DP¹ 1852 Rue Vaneau
 - b. DP¹ 1862 Rue Vaneau
 - c. DP¹1192 1852 Rue du Faubourg St. Antoine
 - d. DQ¹⁹ 252 Rue de Neuve-St. Laurent (Verbois)
 - e. DQ¹⁸ 86 Rue du Faubourg St. Antoine
 - f. DQ¹⁸ 178 Rue Vaneau
 - g. DY¹⁸ 5951 Sainte Pélagie, Dossier Bernays
- (3) Archives de la préfecture de police
Série Aa Cartes 426, Evénements de 1840-47, Quénisset

B. 文献史料

- (1) Ariès, Ph., *Histoire des populations françaises*, Paris, 1971.
- (2) Ashton, R., *Little Germany, Exile & Asylum in Victorian England*, Oxford, 1986. (の場昭弘, 石塚正英, 大島訳『ドイツ人コロニー』未来社, 近刊)

- (3) Audiganne, A., *Les Populations ouvrières et les industries de la France*, Paris, 1860.
- (4) Barbier, F., Les Echanges de librairie entre la France et l'Allemagne 1840-1914, *Les Relations interculturelles dans l'espace Franco-Allemand (XVIII^e-XIX^e siècle)*, Paris, 1988.
- (5) Baudc, J. - J., De la Population de Paris, *Revue des deux mondes*, No. 10, Paris 1847.
- (6) Beck, M., *Nomenclature des voies publiques et privées*, Paris 1898.
- (7) Becker, A., *Les Doctrinaires et les communistes dans la Suisse romande*, Lausanne, 1845.
- (8) Bertier de Sauvigny. G., *La France et les Français vus par les voyageurs américains 1814-1848*, Paris, 1982.
- (9) ———, Américains à Paris 1818-1848, *Bulletin de la société de l'histoire de Paris et de l'Ile de France*, No. 107, 1980.
- (10) Bickel, W., *Bevölkerungsgeschichte und Bevölkerungspolitik in der Schweiz seit dem Ausgang der Mittelsalters*, Zürich, 1947.
- (11) Blösche, H., Die Deutschen in Paris, *Beilage zur Allgemeinen Zeitung*, Nr. 103, München, 8, Mai, 1903.
- (12) Börnstein, H., *Fünfundsiebzig Jahre in der Alten und Neuen Welt*, Bd. 1 Leipzig, 1881.
- (13) Canabich, Fr., *Neuestes Gemälde von Frankreich*, Wien, 1830.
- (14) Chevalier, Louis, *La Formation de la population parisienne au XIX^e siècle*, Paris, 1950.
- (15) ———, *Labouring classes and dangerous classes in Paris during the first half of the nineteenth century*, London, 1973.
- (16) Chlepner, B. S., L'Etranger dans l'histoire économique de la Belgique, *Revue de l'Institut de Sociologie*, Nr. 4, 1934.
- (17) Cochut, A., Le Mouvement de la population, *Revue des deux mondes*, 12, 1845.
- (18) Cornu, A., *Karl Marx und Friedrich Engels, Leben und Werk*, Zweiter Band 1844-45, Berlin, 1962.
- (19) (Cousin), *Paris-Bohème en 1820, La vie de garçon dans les Hôtels-Garnis de la capitale ou de l'amour à la minute*, Bruxelles, 1883.
- (20) Daumard A., *La Bourgeoisie Parisienne de 1815 à 1848*, Paris, 1963.
- (21) Depping, G., B., Die Deutschen in Paris, *Deutsche Pandora*, 3Bd., Stuttgart, 1840.
- (22) *Die Deutschen in Paris*, Paris, (1830-48?).

- (23) *Der Deutsche Steuermann*, Paris, 1844-46.
- (24) Farge, A. et Zysberg, Les Théâtres de la violence à Paris au XVIII^e siècle, *Annales E. S. C.*, 34, 1979. (「18世紀パリにおける暴力」『都市空間の解剖』新評論, 1985年)
- (25) Felix et Louis Lazare, *Dictionnaire administratif et historique des rues de Paris et ses monuments*, 1844.
- (26) Forster, Charles, *Quinze ans à Paris (1832-48)*, *Paris et Parisiens*. 2 vols., Paris, 1848.
- (27) Fregier, H. A., *De Classes dangereuses de la population dans les grandes villes, et des moyens de les rendre meilleurs*, Paris, 1840.
- (28) Gerbod, P., Les Touristes étrangers à Paris dans la première moitié du XIX^e siècle, *Bulletin de la Société de l'histoire de Paris et Ile-et-France*, No. 110, 1983.
- (29) Grandjonc, J., *Communisme, Kommunismus, Communism, 1785-1842*, Schriften aus dem Karl Marx Haus, Nr. 39/1, Trier, 1989.
- (30) —, Demographische Grundlagenforschung, *Les Relations interculturelles dans l'espace Franco-Allemand (XVIII^e-XIX^e siècle)*, Paris, 1988.
- (31) —, Elements statistiques pour une étude de l'immigration étrangère en France de 1830 à 1851, *Archiv für Sozialgeschichte*, Bonn, XV, 1975.
- (32) —, Les Emigrés allemands sous la monarchie de Juillet, *Etudes Germaniques*, Aix-en Provence, 1972.
- (33) —, Etats sommaire des dépôts d'archives françaises sur le mouvement ouvrier et les émigrés allemands de 1830 à 1830 à 1851/1852, *Archiv für Sozialgeschichte*, XII, 1972.
- (34) —, Mémoires d'un artisan allemand à Paris, 1830-34, *Cahiers d'histoire*, No. 15, Lyon, 1970.
- (35) —, und Werner, M., *Deutsche Emigranten in Frankreich-Französische Emigranten in Deutschland 1685-1945*, Paris, 1984.
- (36) Grimm, C. M., *Der Fremdenführer, Wegweiser für Deutsche in Paris*, 1838.
- (37) Gross, G., Joseph Mainzer, ein Trierer Musiker, *Trierisches Jahrbuch*, 1955.
- (38) Grosser, T., Reisen und Kulturtransfer. Deutsche Frankreichreisende 1650-1850. *Les Relations interculturelles dans l'espace Franco-Allemand (XVIII^e-XIX^e siècle)*, Paris, 1988.
- (39) Grün, A. F., *Der Handwerker in der Fremde*, Hannau, 1841.
- (40) Guiral, P. et Thuillier, G., *La Vie quotidienne des domestiques en France au XIX^e siècle*, 1978.
- (41) Hahn, H. H., Die Organisationen der Polnischen "Grossen Emigration" 1831

- 1847, *Nationalebewegung und soziale Organisation I*, Hrsg. v. Th., Schieder und O. Dann, München, 1978.
- (42) Hammer, Karl, *Jakob Ignaz Hittorff*, Stuttgart, 1968.
- (43) Hermann, W., *Gottfried Semper im Exil 1849-1855*, 1978.
- (44) Hillairet, J., *Dictionnaire historique des rues de Paris*, Paris, 1963.
- (45) —, *La Rue de Richelieu*, Paris, 1966.
- (46) Ilse, L.F., *Geschichte der politischen Unetrsuchungen, welche durch die neben der Bundesversammlung errichteten Commissionen der Central-Untersuchungs-Commission zu Mainz und der Bundes-Central-Behörde zu Frankfurt in den Jahre 1819 bis 1827 und 1833 bis 1842 geführt sind*. Frankfurt, 1860.
- (47) Jahn, *Illustriertes Reisebuch*, 1850.
- (48) *Intellectuals and Revolution*, ed. by Kamenka, E., 1981. (野地洋行, 的場昭弘, 坂本達哉, 高草木光一訳『知識人と革命』未来社, 近刊)
- (49) Lambome, P., *Bibliographie parisienne*, Paris, 1887.
- (50) Koszyk, K., *Deutsche Presse im 19 Jahrhundert, Geschichte der deutschen Presse Teil, II*, Berlin, 1966.,
- (51) Kuntze, A., Zur Geschichte der Deutschen in Paris, *Neueste Weltkunde*, Jg., 1844.
- (52) Lescure, M., *Les Sociétés immobilières en France au XIX^e siècle*, Paris, 1980.
- (53) Martin-Fugier, Anne, *La Vie élégante ou la formation du tout-Paris 1815-1848*, Paris, 1990.
- (54) Maurer, G., *Gedichte und Gedanken eines Deutscher in Paris*, Zürich, 1845.
- (55) Meisner, A., *Ich traf auch Heine in Paris*, Berlin, 1973.
- (56) Melzer, Imma, Pfälzische Emigranten in Frankreich während und nach der Revolution von 1848/49, *Francia*, Nr. 1, 2, Sigmaringen, 1985, 1986,
- (57) Menges, F., Die deutschen Hilfsverein in Frankreich vor den ersten Weltkrieg, *Francia*, Nr. 3, Sigmaringen, 1976.
- (58) Mercier, Louis Sebastien, *Le Tableau de Paris*, Vol. I-XII, 1782-88. (抄訳 原宏編訳『18世紀パリ生活誌』上, 下 岩波文庫, 1989年)
- (59) Michelet, J., *Le Peuple*, Paris, 1846. (大野一造訳『民衆』みすず書房, 1977年)
- (60) *Le Monde*, Paris, 1836-37.
- (61) Nadel, *Little Germany, Ethnicity, religion, and class in New York City 1845-80, Urbana and Chicago*, 1990.
- (62) Niedermeyer, A., *Die Deutschen in Paris*, Freiburg, 1862.
- (63) Niegebauer, J. F.D., *Handbuch für Reisende in Frankreich*, Wien, 1832.
- (64) Oesterle G., Urbanität und Mentalität. Paris und das Französische aus der

- Sicht deutscher Parisreisender, *Les Relations interculturelles dans l'espace Franco-Allemand (XVIIIe-XIXe siècle)*, Paris, 1988.
- (65) Pabst, W., *Ecoles allemandes à Paris*, *Francia*, 8, Sigmaringen 1981.
- (66) Parent-Lardeur, *Les Cabinets de lecture*, Paris, 1982.
- (67) —, *Les Cabinets de lecture dans Paris*, *Annales E. S. C.*, 34, 1979. (「パリの読書クラブ」『都市空間の解剖』新評論, 1985年)
- (68) Parent-Duchatelet, *De la Prostitution dans la ville de Paris*, Paris, 1857.
- (69) *Paris Guide, Paris par principaux écrivains et artistes de la France*, 1, 2, Paris, 1867.
- (70) Perrot, A.-M., *Petit atlas pittoresque des quarante-huit quartiers de la ville de Paris*, 1834.
- (71) Piette, Chr., *Les Juifs de Paris, 1805-40, La Marche vers l'Assimilation*, Quebec, 1983.
- (72) Pouthas, H., Ch., *La Population Française pendant la première moitié du XIX^e siècle. Travaux et documents*, Cahier, No. 25, Paris, 1956.
- (73) Pulasky, F., *Bibliothèque polonaise de Paris 1893-1948*, Paris, 1948.
- (74) Püschel, J., *Die Geschichte des German Hospital in London*, Münster 1980.
- (75) Reichard, O., *Guide des Voyageurs en France*, Weimar, 1810. (Rep. 1970).
- (76) Ruge, A., *Briefwechsel und Tagebuchblätter aus der Jahren 1825-1880*, hrsg. von Paul Nerrlich, Erster Buch 1825-1847, Berlin, 1866.
- (77) —, *Zwei Jahre in Paris, Studien und Erinnerungen*, Erster Teil, Leipzig, 1846.
- (78) Sartorius, F., *Die politische, wirtschaftliche und sociale Tätigkeit der Deutschen in Brüssel 1842 bis 1850, Die frühsozialistischer Bünde in der Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung. Ein Tagesbericht*, Berlin, 1975.
- (79) Say, H., *Etudes sur l'administration de la ville de Paris et du département de la Seine*, Paris, 1846.
- (80) Schadwell, A., *The German Colony in London*, *National Review*, 2, Fev., 1896.
- (81) Schieder, W., *Anfänge der deutschen Arbeiterbewegung*, Stuttgart, 1963.
- (82) Schirmacher, K., *Die Ausländer und der Pariser Arbeitsmarkt*, *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 27, 1905.
- (83) Schmoller, G., *Grundriss, II der Allgemeinen Volkswirtschaftslehre*, Leipzig, 1908.
- (84) Schraepfer, E., *Handwerkerbünde und Arbeitervereine 1830-53*, Berlin, 1972.
- (85) Stahr, A., *Zwei Monate in Paris*, 2Bd., Oldenburg, 1851.
- (86) Strähl, W., *Briefe eines Schweizers aus Paris 1835-1836*, Hrsg., J. Grandjone

- etc., Berlin, 1988.
- (87) a. *Statistique de l'industrie à Paris, résultant de l'enquête faite par la Chambre de Commerce pour les années 1847 et 1848*, Paris, 1851. (序訳 河野健二編訳『資料 フランス初期社会主義』平凡社, 1975年)
- b. *Statistique de l'industrie à Paris, résultant de l'enquête faite par la Chambre de Commerce pour l'année 1860*, Paris, 1864.
- (88) Société de statistique de Paris, *La Société de statistique. Notes sur Paris*, Nancy, 1909.
- (89) Tulard, J., *La Préfecture de Police sous la monarchie de Juillet*, Paris, 1964.
- (90) Valentin, V., *Geschichte der deutschen Revolution von 1848/49*, Bd. 1, Berlin, 1930.
- (91) Voss, J., Eine deutsche Lesebibliothek im Paris der späten 18 Jds, *Zeitschrift für Historische Forschung*, Nr. 6, 1979.
- (92) Weber, H., Die Mission de St. Joseph des Allemands in Paris, *Francia*, Bd. 16/3, 1988.
- (93) Wichern, J. H., *Sämtliche Werke, Bd. I, Die Kirche und Ihr Soziales Handeln*, Berlin, 1962.
- (94) 石塚正英『三月前期の急進主義』長崎出版, 1983年.
- (95) 北山晴一『おしゃれと権力』三省堂, 1985年.
- (96) 喜安朗『パリの聖月曜日』平凡社, 1982年
- (97) 喜安朗「居酒屋からゴケットへ」『シリーズ世界史への問い 4巻 社会的結合』岩波書店, 1989年
- (98) 拙著『トリーアの社会史』未来社, 1986年
- (99) 拙著『『フォアヴェルツ』とドイツ人亡命者たち』一橋大学社会科学古典資料センター Study Series No. 12, 1987年
- (100) 拙稿「1840年代フランスにおけるドイツ人人口の動態」『東京造形大学雑誌』6A, 1990年
- (101) 拙稿「『フォアヴェルツ』誌と『経済学・哲学草稿』及び「ビュレノート」『一橋論叢』, 96巻2号, 8月, 1986年
- (102) 拙稿「『独仏年誌』と独仏関係」『ユスティティア』2号, ミネルヴァ書房, 1991年
- (103) 拙稿「パリのマルクスの住居ヴェノー通り」『社会思想史の窓』社会思想史の窓刊行会, Nr. 88, 89, 1991年
- (104) 拙稿「ルーゲとフランス」『ヘーゲル左派—思想・運動・歴史』法制大学出版, 1992年
- (105) 西岡芳彦「1848年のパリ民衆」『一橋論叢』97巻1号, 1987年

- (106) 野村達朗「1850年代初等のアメリカにおけるドイツ人亡命者政治」『1848年共同研究会研究報告集』（愛知県立大学外国語学部）6, 1980年
- (107) 廣松渉『マルクス思想圏』朝日出版, 1981年
- (108) 良知力『初期マルクス試論』未来社, 1971年
- (109) 良知力編訳『資料ドイツ初期社会主義』平凡社, 1974年
- (110) 良知力『マルクスと批判社群像』平凡社, 1972年

（本研究は、1987年度文部省科学研究費補助金奨励研究（A）と1989年度、1990年度東京造形大学研究費（C）、1991年度神奈川大学海外出張による研究助成の成果の一部である）